明治維新の英雄 西郷隆盛

平成 30 年 6 月 3 日(日)
城南公民館 第二会議室
内 田 憲 治

1 薩摩の郷中教育

西郷氏は肥後国（熊本）菊池家の家臣であったが、主家の没落に伴い室町時代初期に薩摩国へ移住し、島津氏が九州をほぼ制圧した折に臣従した。薩摩藩での役職は御小姓与で家格は下から 2 番目の下級藩士である。なお、西郷家の家禄は 47 石で小吉は 7 人兄弟の長男として、文政 10 年（1827）12 月 7 日に生まれた。

西郷家の系譜

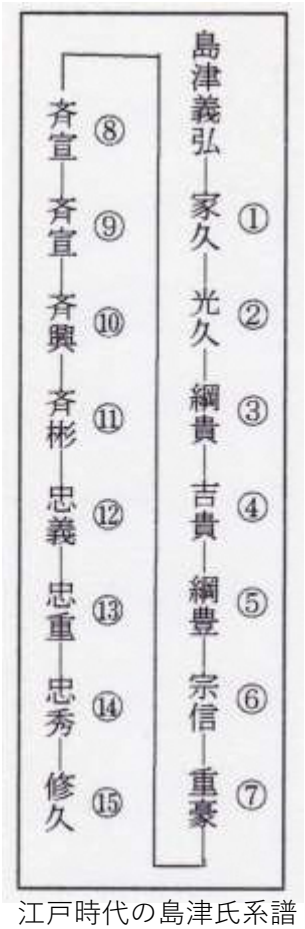
天保 10 年（1839 年）、西郷小吉が 12 歳の時に郷中仲間と月例のお宮参りに行った際、他の郷中と喧嘩騒ぎになりその仲裁に入った。他の郷中の若者が抜いた刀が小吉の右腕内側の神経を切ってしまった。この事件で刀を握れなくなった小吉は剣術を諦め相撲を習い、学問で身を立てようと志した 。若い頃から小吉は非常に率直にものを言う、実直な性格でしかも情に厚く後輩の面倒を良く見る少年に育っていた。郷とは平安時代初期に行われた行政区画の一つで 50 戸を単位として構成され、その名残で後世も集落を郷として表した。薩摩では郷中から指導者を選び、若者たちに学問などを教育し、生活を監視しながら責任を負う郷中教育が盛んに行われていた。

薩摩では、6 歳から 10 歳と 11 歳から 15 歳を稚児、16 歳から 25 歳は二才（青年）という単位に分けて郷中の先輩が後輩を教え育てる強い絆のある風習があった。小吉はその中で指導者的な存在として後輩の面倒を良く見て多くの子弟から慕われていた。小吉が生まれ育った郷中からは、3 歳下に大久保利通（政府の初代内務卿＝現在の総理）、14 歳下に黒木為楨（陸軍大将）、15 歳下に大山巌（西郷小吉の従兄弟で陸軍元帥）、20 歳下に東郷平八郎（海軍大将・元帥）など錚々たる人物を輩出している。

天保 12 年（1841 年）、小吉は元服し吉之介隆永を名乗る。弘化元年（1844）、17 歳になった吉之介は藩の仕事に就くことになった。藩の体制は藩主を頂点に、家老－郡奉行－郡方書役助で、吉之介の仕事は年貢を取り立てる郡方書役助であった。吉之介はこの仕事で重税にあえぐ農民の姿を目の当たりにし、自分の家も裕福ではないけれど貧しい人々を見ると見捨てられず給料を分け与えることもあった。そして、吉之介は身分もわきまえず年貢の軽減を訴える書状を何度も何度も藩の上層部へ送りつけていた。

2 外様大名の雄・薩摩藩

島津氏は鎌倉時代から続く南九州の雄族として勢力を発展させてきた。そして守護大名から戦国大名となり全盛期には九州全土を制圧する程になっていた。なお江戸時代には奄美や琉球王朝を統制下に置き 72 万石 8 千石余となった。琉球王朝は中国や東南アジアまたヨーロッパなどと密貿易を行っており、薩摩藩はその莫大な利益を搾取していた。特に英・仏の関心は当時日本の良質な生糸にあった。



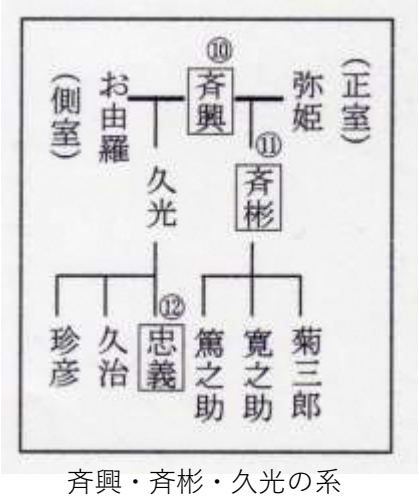
江戸時代の島津氏系譜

ヨーロッパの世界地図には日本の西南端に大きく「Cangoxma（カゴシマ）」と日本国を代表するかのように描かれていた。豊臣秀吉の朝鮮出兵に際し、半島より陶工を連れて帰りそれが現在にまで至る薩摩焼であり陶芸品の一代産地となっている。また薩摩切子といわれるガラス製品など殖産興業も盛んに行っていた。奄美からはサトウキビから精選した砂糖は当時貴重品で大坂で高価で取引されていた。朝鮮半島からは朝鮮人参を仕入れ、それを富山の薬屋へ売り込み、富山からは北前船がもたらす北海道の昆布を薩摩に仕入れ、朝鮮人に渡すと朝鮮では高値で売れた。このように日本の西南端の薩摩は広大な海の交易国の中心にあった。徳川幕府は外国人の渡来や貿易を禁ずる鎖国政策をとっていたが、このような交易に対し薩摩藩は漂流民が海岸へ漂着したので助けた、と幕府へは届けていた。

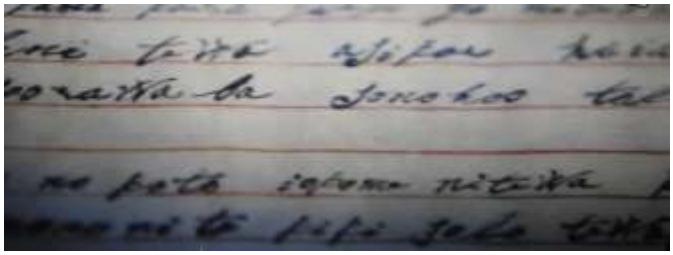
薩摩は江戸より最も遠方にある外様大名であり、幕府の目が届きにくいことで海外との交易が至ってやり易かったのである。つまり、薩摩は日本国内にあってその域から脱していたような地域といえる。なお、薩摩国へ立つ飛脚を“薩摩飛脚“といい、薩摩の国の国情の漏れるのを恐れ他国より薩摩へ入り込んだ不信者は生還させないと言われていた。

3 斉彬が 11 代藩主となる

薩摩藩 10 代藩主の島津斉興（なりおき）は家督を正室・弥姫（いよひめ）（嫁いで周子（ちかこ）に改名）との嫡子・斉彬（なりあきら）ではなく側室・お由羅（ゆら）の方の子・久光に継がせたいという思いが強かった。斉彬は江戸の薩摩藩邸で生まれ育ち、曾祖父・重豪（しげひで）の影響を多く受け幼い頃から洋学に関心を示していた。重豪（しげひで）はオランダに興味を持ち蘭癖（らんぺき）（オランダかぶれ）大名などと呼ばれており、百科事典や辞書や天文館なども設置していた。斉彬（なりあきら）は 18 歳の時、



斉興・斉彬・久光の系


斉彬が書いたローマ字の日記

重豪（しげひで）に連れられオランダ商館付のドイツ人医師シーボルトに面会していた。それらの影響で斉彬は広く見聞を深め、早くから世界を見つめるなど西欧列強のアジア進出に危機感を抱き、本格的な西欧の科学技術主導をするべきと主張していた。斉彬は外国語にも興味を持ちローマ字をマスターしローマ字で日記を書いていた。天保 13 年（1842）、斉彬は大国の清（中国）がイギリスとの阿片禁輸措置から戦争となり敗北し不平等条約を締結せざるを得ず清は半植民地化されてしまった。このことに斉彬は大きな衝撃を受け、“日本一致一体”の体制を整えないと、近い将来は欧米列強の植民地にされてしまうという危機感を募らせていた。ましてや現在の幕藩体制ではこれらに全く対応できないと考え、国内では水戸の徳川斉昭（なりあき）や老中・阿部正弘、蘭学者らと親交を結び藩内外で斉彬の人格やその世界的見識を高く評価されていた。その後、家督問題や藩主斉興に対する不満などで薩摩藩内は“お由羅（ゆら）騒動”が勃発し、若者の指導的立場にあった赤山靭負（ゆきえ）は切腹、他の者も多くが処罰された。幕閣は斉興の藩経営に対し疑問視する者が多く、それらの圧力もあり嘉永 4 年（1851）、島津斉興が隠居し島津斉彬は 43 歳の時に藩主となった。

11 代藩主 島津斉彬

4 斉彬に仕える吉之介

嘉永 5 年（1852 年）、吉之介は父母の勧めで伊集院兼寛（かねひろ）家の須賀と結婚したが、7 月に祖父、9 月に父・吉兵衛、11 月に母・マサが相次いで死去し、一人で一家を支えなければならなくなった。嘉永 6 年（1853 年）2 月、吉之介は家督相続を許可されたが、役は郡方書役助（こおりかたかきやくたすけ）と変わらず、禄は減少して 41 石余であった。この頃に通称を吉之介から善兵衛（以降は西郷と記す）に改めた。12 月、ペリーが率いる東インド艦隊が浦賀に来航し、幕府からの呼び戻しで藩主・斉彬は急ぎ江戸へ向かうことになり、この時兼ねてより目を掛けていた西郷（26 歳）を江戸へ同行させた。江戸での暮らしで西郷は各藩の実力者たちと友好を深めると同時に交渉人としての腕を磨いた。斉彬は「あの男を使いこなせるのは自分しかいない。真に役立つ者は西郷という者で我が家の貴重な宝でござる」と語っていたという。斉彬は尚古集成館（しょうこしゅうせいかん）を設置し、殖産振興や電信・ガス灯の実験、防衛のための大砲造りを始めることにした。従来の大砲は青銅（銅と錫の合金）製であったが、素材が安くて丈夫な鉄製で造

浦賀沖（横須賀市）へ黒船来航図

ることにした。しかし、それには高温で純度の高い鉄を取りだすための反射炉が必要であったが苦心を重ね成功にこぎつけた。また製品にするための溶鉄炉と製品に穴を開ける鑽開台も 5 年の歳月を経てようやく完成し大砲造りを開始した。その後、西洋式の軍艦の建造に取りかかり、中浜万次郎の情報を得て小型の洋式帆船、次に大砲を備えた日本初の大型軍監「昇平丸」、次いで日本初の蒸気船「雲行丸」を造った。それはペリー来航から 2 年後のことである。

安政元年（1854 年）、斉彬の江戸参勤に際し西郷は江戸詰に任ぜられ赴くことになった。4 月、“御庭方役”となり、当代一の開明派大名（知識に明るく聡明な大名）であった斉彬から直接教えを受けるようになり、またぜひ会いたいと思っていた碩学（学問の広く深い大学者）藤田東湖にも会い、国事について教えを受けた。薩摩の西郷の実家では 11 月に、貧窮の苦労を見かねた西郷の妻の実家・伊集院家は西郷家から須賀を引き取り離縁になってしまった。以後、次弟の吉二郎が一家の面倒を見ることになった。12 月、西郷は越前藩士・橋本左内（蘭学・医学を学び藩の洋学を振興。安政の大獄で斬罪）が来訪し、国事を話し合いその博識に驚いた。この頃から政治活動資金を斉彬より時々賜るようになる。

安政 3 年（1856 年）5 月、武田耕雲斎（水戸藩の家老）と会う。7 月、斉彬の密書を水戸藩の徳川斉昭に持って行く。12 月、第 13 代将軍・徳川家定と斉彬の養女・篤姫（敬子）の結婚にこぎつけた。斉彬の考えは、篤姫を通じて一橋家の徳川慶喜を第 14 代将軍にして、幕府を中心とした中央集権体制を作り、後に開国し富国強兵をはかって露・英・仏など諸外国に対処しようとするもので、西郷はその手足となって活動した。そして主君の斉彬の言葉は「よいか西郷、心得違いを致すな。薩摩国内のあらゆる不正を許さぬ、というそれは実にそなたらしい。されどもっと物事を大きく見よ！薩摩は天下の一部に過ぎぬ。薩摩の西郷ではなく天下の西郷になれ！」と、それは西郷の胸に大きく響いた。

5 西郷は奄美大島へ流罪

安政 5 年（1858）7 月 16 日、人知開け知識に明るく聡明な斉彬は病没してしまった。藩政を荷ってわずか 7 年の歳月であった。ましてや享年 50 という早い旅立ちだった。それは西郷が 31 歳の時で悲嘆と絶望感で主君の跡を追い殉死を決意したが、それを思い留めたのは親交のあった京都清水寺の僧侶・月照で「西郷様がお志を継いでこそ斉彬様はお喜びになるでありましょう」という言葉であった。しかし、大老井伊直弼が政争の反対派らに下した弾圧事件“安政の大獄”で政治的な行動をとっていた月照の命が狙われるようになり、その身を案じ西郷は月照を連れて

月照住職

薩摩へ逃れた。しかし、薩摩藩は幕府の圧力を交わすため「日向へ行け」と西郷に言ったが、これは「死んで来い」という意味であった。自分だけなら逃れることは出来たがそういうことが出来ないのが西郷の性格であった。

島妻の愛加那

月照は「大君のためには何か惜しからん薩摩の迫門に身は沈むとも（天皇の為には何一つ惜しむものはない、たとえこの身が薩摩の波の中に消えようとも）」、西郷は「ふたつなき道にこの身を捨て小舟波たてばとて風ふかばとて（二つとない大事な命ではあるものの我が身を捨てるための乗った舟で波が立とうが風が吹こうが行かねばなるまい）」の辞世を残し真冬の海へ身を投じた。月照は絶命し西郷は一命を取りとめたものの心中は複雑な思いであった。

西郷は奄美大島へ流罪にされ、島の暮らしで子供たちに学問を教えて比較的落ち着いた生活であった。そんな時に島娘のとぅま（愛加那）と出会い結婚し二人の子供にも恵まれた。安政 7 年（1860）3 月 3 日、「桜田門外の変」が勃発し幕府の権威は大きく揺らぐことになった。文久元年（1861）、奄美大島の暮らしが 3 年を経たころ西郷は薩摩藩に呼び戻されることになった。しかし、当時の島妻（現地妻）は島から出ることが許されなかった。斉彬の死後、異母弟・久光の子忠義が斉彬の養子ということで藩主になったが、実権を握っていたのは父・久光であった。公武周旋（朝廷と幕府を取り持つ）に乗り出した久光は京都での手づるがなく大久保らの進言で奄美大島の西郷に召喚状を出した。西郷は召還状を受け取ると、世話になった人々への挨拶を済ませ愛加那の生活が立つようにして薩摩へ発った。

島津久光

文久 2 年（1862）1 月 14 日に出帆し、2 月 12 日に鹿児島へ着いた。幕府に西郷が生きていることが発覚しないように西郷三助から菊池源吾や大島三右衛門と改名していた。

6 今度は沖永良部島へ流罪

島津久光に召された西郷は、久光が無官であり、斉彬ほどの人望が無いことを理由に久光公は上京すべきでないと主張し、また「御前には恐れながら地ゴロ（田舎者）なので周旋は無理だと存じもす」と言ったので著しく久光の機嫌を損ねた。一旦は京都への同行を断ったが、大久保の説得で承諾し旧役に復した。3 月 13 日、下関で待機する命を受けて先発した。下関で待機していた西郷に、京・大坂から緊迫した情勢を聞いた西郷は、3 月 22 日大坂へ向けて出航した。過激派志士たちの京都焼き討ち・挙兵の企てを止めようと試みた。しかし、4 月 6 日、姫路に着いた久光は、西郷が待機命令を破ったこと、西郷が志士を煽動していると報告を受けたことから激怒し西郷に捕縛命令を出した。西郷の実家では

沖永良部島の牢獄

弟たちが謹慎処分を受け家禄・家材は没収され最悪の経済状態に追い込まれた。そして西郷自身は沖永良部島（おきのえらぶじま）へ流刑となった。西郷が閉じ込められた牢は、４畳ほどの広さで周囲を格子で囲っただけの風雨にさらされる極めて劣悪なもので健康を害してしまった。本来は切腹を申しつけられる事態であったが藩士たちが騒ぐのを恐れ、風雨が吹きさらす島で「死んで来い」という形での流罪であった。気の毒に思った島の代官が自費で座敷牢を作ってくれたので風雨や露を凌ぐことができ健康を取り戻した。

西郷は島の人達に学問を教えていた。島で 2 年を経過した西郷は禅を学びそこで“敬天愛人”の思想に到達した。西郷が流罪にされている間に時代は大きく動いていた。文久 2 年（1862）8 月 21 日、島津久光が江戸から薩摩へ帰る行列が相模国生麦（なまむぎ）（横浜市）にさしかかった際、イギリス人の 4 人が乗馬のまま行列を遮る事件が発生した。それに怒った藩士は「無礼者！」と、1 人の青年を殺害してしまった。いわゆる「生麦事件」で、翌年イギリス軍艦が薩摩を砲撃する「薩英戦争」が勃発した。それを治めるための薩摩の交渉人 2 人はイギリス軍艦に乗り込んだが捕虜になり横浜で賠償問題を解決することになった。横浜で行われた交渉でイギリスは全く予期も思いもよらないような提案を薩摩藩がしてきた。交渉にたけた重野厚之丞は、「賠償金は支払うので、その代わりイギリスから軍艦を買いたい。そして操縦法を学ぶためイギリスへ我が藩の若者を留学させたい」というものだった。それは薩摩藩の意識として鎖国から開国へと大きく舵を切るきっかけになった事件であった。しかし旧態依然とした幕府には国を任せられないとして各地で倒幕の気運が高まっていた。

糸夫人

文久 3 年（1863）、孝明天皇（明治天皇の父）より島津斉彬に従三位（じゅさんみ）権中納言を賜わるとともに照国大明神の神号が授けられ、照国神社（鹿児島市照国町）が創建された。元治元年（1864）、37 歳になった西郷は 3 年ぶりに沖永良部島から釈放された。倒幕の風潮が高まる薩摩で主導的な存在として活動するなか、慶応元年（1865）に岩山家の糸と再婚同士で結婚した。翌 2 年（1866）、西郷は土佐出身の坂本龍馬の仲立で長州藩と手を組む、いわゆる“薩長同盟”が行われた。翌年、倒幕の大義名分を得るため朝廷への工作を重ね「倒幕の密旨（みっし）」を得た。ところが 15 代将軍・徳川慶喜（よしのぶ）が大政奉還してしまったので倒すべき幕府が無くなってしまった。「慶喜公は思いのほか策士でごわした」と西郷はつぶやいたという。西郷は下総国出身の尊王攘夷派の志士・相楽総三（さがらそうぞう）に

徳川慶喜

命じ江戸で騒乱を起こすよう送りこみ、あちこちで騒乱を起しては薩摩藩邸に逃げ込んだ。このことが幕府の知るところとなり幕府側は薩摩藩邸を焼き討ちにして西郷はこれを倒幕の口実にした。

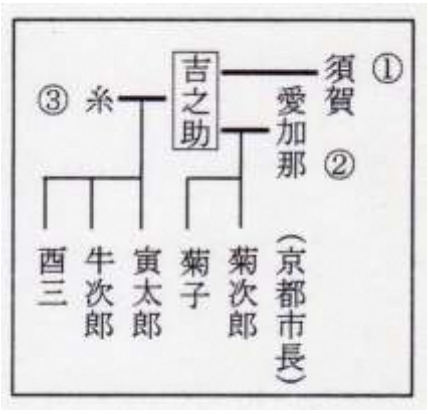
西郷隆盛

勝海舟

7 戊辰戦争の勃発

慶応 4 年（1868）、新政府軍と旧幕府軍とが争ういわゆる「戊辰戦争（ぼしんせんそう）」に突入した。初戦は 1 月の「鳥羽・伏見の戦い」で一進一退の攻防が続くなかで新政府軍側から「錦の御旗」が掲げられた。これを見た徳川慶喜は自分が「朝敵」にされたことを知り、その衝撃で愕然とし江戸へ逃れ謹慎してしまった。「鳥羽・伏見の戦い」に勝利した新政府軍は江戸へ向かって進軍した。慶応 4 年 3 月 14 日、江戸総攻撃の前日に江戸城で西郷は勝海舟と会談した。西郷は以前より勝に面識がありその見識の深さに惚れこんでいた。両者の協議の結果、江戸城は無血開城されることになった。勝は西郷との面談の時のことを「西郷は俺の言うことを一々信用してくれて、この間に一点の疑念も挟まなかった」と述懐している。それは西郷の「いろいろ難しい議論もありましょうが私が一身をかけてお引き受けします」という言葉があった。勝は西郷のこの一言で「江戸百万の生霊もその生命と財産を保つことができ、徳川氏もその滅亡を免れた」と、している。その後、「会津若松城の戦い」や函館の「五稜郭の戦い」を経て「戊辰戦争」は終結した。

明治 2 年（1869）、「戊辰戦争」を勝利に治め新政府に加わること無く郷里の薩摩に戻った西郷は 42 歳になっていた。「新政府の発足にどれだけ功績があったとしても、職務をこなす能力のない人に褒美として役職を与えるのは良くない。役職はふさわしい人材に預け功績には金で報いるべきである」と、いうのが西郷の信念であった。そんな西郷の思いとは裏腹に明治政府は薩摩と長州出身者が優遇され、その中で派閥争いが生じ権力を振りかざす者が多くおり腐敗を極めた。民衆の中には「徳川幕府の方がまだましだった」という声が聞かれるようになっていた。なお、旧士族も生活は困窮しており、重税に苦しむ人々は各地で一揆を起こし新政府はその鎮静化に手を焼いていた。政府はこの危機を乗り切るため人望の篤い西郷に頼ることになった。



西郷吉之助隆盛の家族図

明治 4 年（1871）、新政府の要望により西郷は決意し上京したが、新しい時代を築いたにもかかわらずその腐敗ぶりに愕然（がくぜん）とした。下級武士だった者が立派な役職に就き、

旧大名から接収した立派な屋敷に住み、綺麗な服を着て美しい女性を囲って、財産を殖やすことばかり考えている、こんな事なら幕府を倒して明治維新を成し遂げた意味はない。西郷自身は、与えられた広すぎる屋敷を書生たちの寄宿舎にして質素な生活を続けた。当時、政府の最大の課題は国の中央集権体制を確立することであった。そのためには廃藩置県を行い諸大名から土地と人民を取り上げる必要があった。しかし、永年の主従体制を壊しそれを実施するのは極めて困難なことで一歩間違えば再び内乱状態を招き兼ねない。西郷は大久保利通と木戸孝允と協議を重ね薩摩と長州とで軍を組織し、もし内乱が起これば西郷が鎮圧すると語ったが幸い紛争は起こらなかった。西郷は「国政を担うということは、天の道を行うことである。いささかでも私心を挟んではならない」、という持論を語っていた。

８ 岩倉使節団外遊と朝鮮国交問題

明治４年 11 月、廃藩置県が実施された直後に大久保利通と木戸孝允（たかよし）は公卿の岩倉具視（ともみ）らと「岩倉使節団」として欧米視察団を結成し出発することになった。西郷は留守政府の筆頭参議という立場であった。外遊へ行く岩倉使節団からは西郷に「止むを得ない場合を除いて成るべく新規の改革を差し控えるように」と釘を刺されていた。しかし、政府の足場がまだ固まらず混沌とした状況では即座に対応しなければならないこともあった。またそれらをそのまま放置出来ない性格の西郷は次々と改革を行った。まず農民の土地所有を認める「地租改正」、武士でなくとも兵役を認める「徴兵令」、全国に小学校を設立する「学制の発布」、さらに太陰太陽暦を廃し「太陽暦」の採用や、「人身売買の禁止」、「裁判所の設置」、「農民の職業選択の自由」、「神社仏閣の女人禁制の廃止」等々である。外遊中の大久保利通から西郷に手紙が届いた。その手紙には「ロンドンの空は煙突の煙で埋め尽くされている。この黒い空が素晴らしい。これこそが近代化である」と記されていた。

岩倉具視

大久保利通

木戸孝允

近世の日本の朝鮮観は、朝鮮の文化や学問に畏敬の念を持っていたがその反面、日本の建国神話や伝説に根差す優越意識もあった。それは幕末の国学の普及とともに朝鮮蔑視観が強くなり、欧米からの外圧が加わるや尊王論（天皇の権威を強調する思想）や攘夷論（幕末に台頭した外国を排除し鎖国を主張する議論）が高まるなか、統一国家の形成の一環として「征韓論」が唱えられた。ちなみに国学とは、古事記・日本書紀・万葉集などの古典に基づく日本固有の文化や精神を明らかにしようとする学問で、荷田春満（かだのあずままろ）・賀茂真淵（かものまぶち）・

本居宣長（もとおりのりなが）・平田篤胤（ひらたあつたね）らによって確立されたものである。

朝鮮からは中世（室町時代）より近世（江戸時代）に朝鮮国王の国書や進物を携えて、日本の統一権力（幕府の将軍）の許へ派遣された外交使節団が訪れていた。しかし、明治維新以降は朝鮮との国交が途絶えていた。それは日本の明治維新とは欧米列強に屈するかたちで開国したものである。そのような国に朝鮮から外交使節団を送る必要はないというものであった。西郷は日本や朝鮮や中国などの隣国が結束して欧米に対応しないと植民地化される可能性があると考えていた。国交回復交渉が進まない中で政府の中には圧力をかけて進めるべきという議論も台頭し始めた。とりわけ木戸孝允は「日本と朝鮮とは唇歯（しんし）の関係にあり、朝鮮制覇は日本の国家統一の基礎である」と述べており、この考え方が征韓論の根底をなすものとされた。

朝鮮との国交回復交渉が進まないなかで板垣退助は「武力行使も已むなし」という議論を唱えた。しかし、西郷は板垣に「それは早急に過ぎる。兵隊などを派遣すれば朝鮮は日本が侵略してきたと考え要らぬ危惧を与える恐れがある」とたしなめた。そして西郷は自らが平和使節として、烏帽子（えぼし）・直垂（ひたたれ）（武士の礼服）を着け単身で朝鮮に赴くことにした。「立派な使節にはなれないかも知れませんが死ぬくらいのことは出来ると思います」と語ったという。岩倉使節団が外遊から帰国する以前、留守を任されていた政府では西郷の遣朝鮮使節派遣を内定し、岩倉使節団の帰国を待って正式に決定することとしていた。しかし、岩倉使節団が帰国して間もなく太政大臣（だいじょうだいじん）の三条実美（さねとみ）の急病により、岩倉具視が太政大臣代行となり事態は一変し朝鮮への西郷大使派遣は中止となった。

実は岩倉使節団が西郷に異を唱えた背景には、「これ以上西郷に功績を与えてはいけない」ということが要因とされている。岩倉使節団は留守の間に様々な改革で実績を挙げ、しかも大衆にも評価されている西郷を主導権争いで自分たちの邪魔になるという可能性を考えていたからである。西郷が目指していた明治政府は道義を重視する理想主義であったが、大久保利通ら政府首脳は世界の現実を見据えた上での合理主義であった。

９　西郷の下野と西南戦争

明治６年（1873）10 月、西郷は陸軍大将・参議（太政大臣、左右大臣の次の官職）・近衛都督（このえととく）（皇居警備長官）など総ての職を辞した。それは西郷が 46 歳の時で、政府を去った後は妻・糸と子供たちと静かな余生を過ごすことを考えて郷里へ帰った。

明治 7 年（1874）、西郷とともに政府を去った江藤新平が「佐賀の乱」郷里へ帰った西郷

を起した。その理由は、明治維新によって従来の立場や待遇を失った佐賀の不平士族たちに後押しされたものであった。反乱は鎮圧されたものの不平士族への対応が全国的に大きな課題となった。江藤新平は明治政府で司法と行政の分離、裁判所の設置、検事・弁護士制度の導入など、司法改革に力を注ぎ日本近代司法制度の基礎を築いた政治家であった。「佐賀の乱」の情報を聞き下野していた西郷はこの事件で薩摩の不平士族の受け皿となるべく「私学校」を設立した。それは一方で若い士族に欧米列強の脅威に備えようという考え方で、国難に際し兵士として育成しようと考えていた。2 年後、福岡で旧秋月藩の士族が奸人（悪人）政権の打破を叫び「秋月の乱」、熊本では政府の欧化政策（日本の伝統文化を廃し西洋文化に傾倒した政策）に反対して「神風連の乱」、山口では政府首脳の行政の行政方針を批判し「萩の乱」などが勃発した。当時、政府の内務卿（現在の内閣総理大臣）に就任し事実上トップの位置にいたのは大久保利通でその政策に全国の士族は反発を強めていた。

政府は北九州などで相次ぎ争乱が起きており、また西郷の私学校にも多くの士族が集まっている。その内そこでも騒乱を起すのではないかと嫌疑を募らせていた。そこで政府は鹿児島出身の警察官を密偵として私学校へ送り込んだ。不審に思った生徒は密偵を次々と捕縛し、その結果は西郷の暗殺計画があることが明白になった。そんな中で鹿児島にある陸軍の弾薬庫を大坂に移送する計画を生徒たちが突き止めた。それを知り生徒たちは暴走し陸軍の火薬庫を襲撃してしまった。それを知った西郷は「なんつう早まったこつを……」と絶句しという。実は密偵が捕縛されたことで、「陸軍の弾薬庫を大坂に移送する計画」というのはデマで政府が仕掛けた罠にはまってしまった。火薬庫にあった武器は旧式の銃と弾薬のみで、しかも弾薬は水に浸けられていた。西郷は今後の対策や対応を考えるため生徒たちを緊急招集した。生徒たちは一同に「挙兵すべき！」と訴えたので、ここに至り西郷は「おいの身体はおはんらに差し上げもす！」と語った。

明治天皇

明治 10 年（1877）2 月 14 日、西郷を総指揮官に鹿児島の士族 1 万 3 千人が終結した。そして熊本城の熊本鎮台（陸軍編制の最大単位）を陥れ九州を制して大坂を目指す、そうすれば四国や関西や全国の応援がある、と考えた。事実、九州各地から反政府の士族が 7 千人が呼応してきた。熊本城の政府軍は 3 万 7 千人の大軍で西郷軍は次第に不利な状況となって鹿児島の城山へ籠った。西郷は腹と股に銃弾を受け「もうここらでよか！介錯をお頼みもす！」といい自刃した。明治維新の英雄西郷隆盛は 50 年の生涯であった。西南戦争で西郷が自決したことを知り「西郷を殺せとは言ってない」と

明治天皇は語ったという。翌、明治 11 年（1878）、大久保利通は赤坂仮皇居に向かう途中の紀尾井坂下で政府の施策に不満を持つ旧士族らに暗殺された。大久保の懐には外遊中に西郷からの手紙があったという。その手紙には「人間の本質を見ての近代化が必要で、それがないと民族の本質が無くなってしまう。外面的な近代化ではなく人間の内面的な近代化が大事である」と記されていた。心に沁みた西郷の手紙をいつも懐にいれていた。

10 西郷隆盛のエピソード

西郷が明治 4 年（（1871）政府の要請により政務に戻った際、急ぎ明治天皇へ差し出す書類に西郷の署名が必要となったが、その時たまたま西郷が不在であった。係の書記官が傍にいた西郷の幼友達の吉井友実に聞いた。実は西郷は余りにも名前が変わったので吉井も戸惑い、思いついた名前「隆盛」と告げたので、その名前で署名され差し出された。しかし、「隆盛」は西郷の父の名前で本当は「隆永」であったが、天皇に差し出した書類に名前違いがあったとは言えず、その後は吉之助隆盛で通した。

西郷の体格は身長が五尺九寸八分(179cm)、体重は二十九貫(108.75kg)、喫煙者だったが酒は弱くて下戸（げこ）であったという。西郷の肖像については現在までに西郷の写真は発見されていない。もともと写真嫌いだったという。有名な肖像画はイタリア人画家キヨッソーネが西郷の死後に、顔の上半分を西郷の実弟・従道（つぐみち）、下半分は従兄弟・大山巌の顔を合成して描いたものだが、糸夫人によると全く似てないという。

キヨッソーネ画　銅像の顔

明治 22 年（1889）、「大日本帝国憲法」発布された。西南戦争の後、西郷は朝敵の汚名が着せられていたが、明治維新以来から明治天皇の巡幸に多く随行した際に西郷の人柄に触れ愛した明治天皇は「もう許してやれ」との意向で、死後 12 年を経て大赦で汚名をそそぐことになり正三位を贈られた。天皇は西郷と相撲を取りよく放り投げられた、という。そういう西郷の不要な忖度（そんたく）や諂（へつら）いのない、真っすぐで実直な性格を好んでいた。

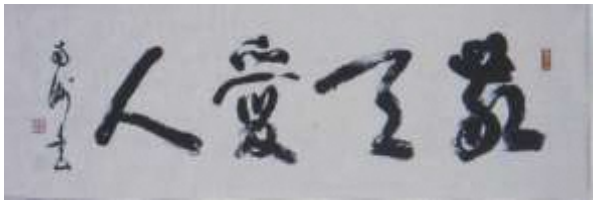
上野公園の西郷像

明治 31 年（1889）12 月 18 日、没後 31 年を経て上野公園に西郷隆盛の銅像が建立された。費用は、宮内省より 500 円が下賜（かし）され、全国より 2 万 5 千人余の有志の寄付金が集まった。除幕式に招かれた西郷の糸夫人は「こ

の人は誰、うちの主人はこんなお人じゃなかったです」と言ったそうである。また、「主人は浴衣姿で散歩は一度もしていなかった」とも言ったという。当初は銅像を皇居内に建てる案もあったが一時は朝敵となったことから反対があった。陸軍大将像の雛形も出来ていたがある筋らか猛烈な反対があった。それは西郷の高い人気が反政府的気運を醸しかねない、と危惧し犬を連れて歩くという、無害なイメージを民衆に定着させようとした、と伝わっている。

様々な肖像画のなかで右端のものが実像に近いと近親者は語ったという

西郷が残した主な言葉



◇『敬天愛人』は、「天を敬い人を愛する」と読む。人はそれぞれ天から与えられた“天命”があり、それに従って人は生きるのである。だからこそ人は先ず天を敬うことを目的とするのである。天が我々を愛してくれるように人は他人に対しても、天と同じように“慈愛”を持って接することが何よりも必要である。

◇人は天から天命というものを与えられ、それに従い生きている。自分は人を相手にしていない。天を相手にし仕事をしている。天に対して恥じるところがなければそれで良い。

◇「“事”には上手下手が、“物”には出来る、出来ないがあり、そのことに心を動かされるひともいる。しかし、人は“道”行うものである。“道”を実践するのに上手下手もなく、出来ない人もいない。だから、ひたすら“道”を行い、“道”を楽しむのだ。

◇子孫のために美田を残さず。（子孫のために財産を残せば子孫は努力をしなくなり、かえって子孫のためにならない）

◇命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難（かんなん）をともにして国家の大業は成し得られぬなり。

◇西洋は野蛮じゃ。西洋が本当に文明の国ならば未開の国に対しては慈悲を持って接し、懇々と説諭を加えて開明に導くはずであろう。ところが現実はそうではなく相手が未開蒙昧（もうまい）（文明が開けず昧（くら）い）の国であればあるほど酷く残忍に振る舞ってきたではないか。これこそ野蛮と言わずして何ぞ。

◇節操を守り、義理を重んじ、恥を知る心を持つこと。このような姿勢を持たないなら国は維持出来ない。道徳心を失えば国は崩壊する。

城南地区地域づくり協議会 文化財部会 歴史講演会

― 赤城南麓に続く千年の神事 ―

「二宮赤城神社の御神幸」

令和元年９月 29 日（日）
城南公民館 １階ホール
内 田 憲 治

１ 毎年二度行われる御神幸

御神幸は春の４月初辰日、二宮赤城神社から三夜沢赤城神社へ向かって出発する。準備は出発する辰日の 11 日前、巳の日に始まる。弓幹は桑の枝で作り矢篦は萱で千本作る。東参道・西参道・南参道の約 300 ㍍に注連縄を張り留場を作る。留場は道の両側に竹竿を立て注連縄を張ったが、現在は交通の関係で片側に設置している。境内の東・西・南の鳥居にも注連縄を張り、悪霊など邪悪なものが入ることを防ぎ人の出入りも禁ずる。日付が午の日になり、子の刻（午前０時～２時）に矢打ちを行う。宮司と神社総代の二人によって社殿から境内の四方固めを行い、次に随神門から南鳥居を出て、東・西・南参道の順に千本の矢を射納めると境内と各参道はすべて聖域になる。この矢打ち神事の際は一切声を発すること無く行う。また、聖域が保たれた境内で大声を発っして騒ぐことは禁じられている。

東・西・南の留場の位置

聖域状態の境内で 11 日目の辰日の朝を迎える。御神幸の奉斎の儀のあと御神体を納めた御輿を担ぎ、南鳥居の注連縄を切り、梵鐘の音を背に二宮赤城神社を出発する。御神幸の一行は宮司・神社総代２名・自治会役員２名・氏子 10 名（各組より１名）の総勢 15 名である。徒歩での御神幸は、日の出とともに出発し帰還すると夕方になったという。それは女堀沼の中道から荒口東方を経て荒子の辻に出る。西泉沢から大胡町へ入り、錦の御旗をなびかせ、白丁（白布の狩衣）が担ぐ御輿の一行に、町内の人々は道沿いに出て「二宮様が通る」と言い、なかにはお賽銭をあげる人もいたという。

赤城山へ向かってひたすら歩く御神幸の列（昭和 50 年の歩行御神幸復元）

大胡町河原浜の近戸神社で御神幸の無事を祈願し休憩する。ここから柏倉の御輿懸で御神輿を石台に載せ休息する。すると阿久澤家の人々によるお茶やご馳走による接待を受ける。それは、江戸前期頃に柏倉の二之宮村有地へ阿久澤一族が集落を構えたことに起因すると伝わっている。松並木を経て三夜沢赤城神社へ到着すると拝殿に御神輿を上げ、二宮赤城神社の宮司立会により、三夜沢の宮司による神事が行われる。それが終わると直会の後、帰路はどこへも立ち寄ることなく二宮赤城神社へ帰還し、御神体を納め御神幸の神事はすべて終了する。12 月の初辰日の御神幸も 4 月の初辰日と全く同様に行われ一年の御神幸はすべて終了する。なお、御神幸は昭和 44 年からマイクロバスで行われるようになった。

柏倉の御輿懸

里人にとって祖霊信仰の赤城山は、水田稲作が盛んに行われるようになると、湖や川から流れくる水は水田稲作の灌漑用水への信仰に変わった。なお、“神御衣祭”という御神体へのお着せ替えを行う神事がある。それは歳を経た女性一人で木綿を紡ぎ布を織り、丑の刻（午前 2 時）に神主立ち合いで着せ、すべてを一日で行う。この神事は 壬 子年に行われ最後は昭和 47 年なので、次回の 壬 子は 60 年後の 2032 年である。壬年は水を司る年廻り、ということから御神幸は水信仰であることを物語っている。二宮赤城神社の御神幸は、灌漑用水を得るため春に赤城の山の神を迎え、里に降りると田の神となり稲作の豊穣を見守り収穫が終わると、山へ送ると山の神となる、という神事である。なお、御神幸が行われる“辰の日”に赤城南麓一帯では田植を忌む習慣がある。

2　二宮赤城神社

二宮赤城神社の全景（『上野名蹟図誌』より）

第 11 代垂仁天皇の御代に社を置かせ給いしと伝わる。従五位下に叙されたのは承和 6 年（839）と記されている『続日本後紀』）。次いで貞観 9 年（867）に正五位下、貞観 11 年（869）正五位上、貞観 16 年（874）従四位下、その後も随時昇叙され元慶 4 年（880）に従四位上に叙された。延喜 5 年（905）醍醐天皇の命により、古代の法典『延喜式』の編纂が始まり延長 5 年（927）に撰進され、上野国の神社は一宮貫前神、二宮赤城神、三宮伊香保神の三神は大社、小祝神（高崎石原）、宇藝神（富

岡神成)、榛名神（高崎榛名)、甲波宿祢神（渋川行幸田)、賀茂神（桐生広沢)、美和神（桐生宮本)、火雷神（玉村下之宮)、倭文神（伊勢崎上之宮)、大國神（境下淵名）の九社は小社として『延喜式の神明帳』に登載された。大社は延喜式内社として明神の待遇が与えられた。そして一宮貫前神社は稲含山、二宮赤城神社は赤城山、三宮伊香保神社には水沢山がそびえ、人々は山を御神体として崇敬してきた。なお、国司からも特殊な取り扱いを受け朝廷からも優遇されていた。上野国は東山道 15 国のうち東北地方経営の重要な拠点とされており大国とされた。上野国への新任の国司は着任すると吉日を選び、まず式内社の一宮・二宮・三宮への参拝が慣例とされており、それが済んでから政務を執るのを例とした。後に式内社を合祀する総社神社が建立され、総社神社を参拝することで式内社すべての神社を参拝したこととし政務に就いた。

長元元年（1028）の九条家本延喜式裏文書の『上野国交替実録帳』に「正一位赤城明神社」と記され、11 世紀頃の赤城神社の建造物の種類が分かる。

「御玉殿（御宝殿） 1 宇、御美豆垣（瑞垣） 1 廻、御向殿（拝殿） 1 宇、御帛殿 （本殿か）1 宇、大門（随神門）1 宇、鳥居 1 基、荒垣ー 前・東・西、館屋（主な建物） 1 宇、陪従屋（主屋に次ぐ建物）一宇、厨屋（食物を調理する建物） 1 宇」の記録は神社の建物の配置と全容が記されている。

第 70 代後冷泉天皇（在位 1045～1068）の勅願所（勅命によって国家鎮護・玉躰安穏を祈願する神社）として仏舎利一粒を賜った。治承 4 年（1180）足利俊綱が東上州を蹂躙し上野国府を襲った事件が勃発した。記録はないがこの時に二宮赤城神社は兵火に遭った可能性が考えられる。それは後年「頼朝公當國我妻郡草津入湯之御時、御心願有テ此所ニ宮御建立有、時ノ奉行岡部九内忠成、二ノ宮太郎浅忠、建久二年此所開基（江木町町田藤江氏所蔵文書)」と記されている。これによれば建久 2 年（1191）に頼朝は草津へ入湯のみぎり、荒廃していた二宮赤城神社の社殿修築を上野国守護職安達藤九郎盛長に命じ、岡部九内忠成と二ノ宮太郎浅忠を奉行に任じ建立した、ということである。その後、境内に頼朝が源氏の氏神として尊崇している八幡宮を勧請し建立し、江戸時代には毎年 8 月 15 日の祭りに前橋藩主を招待し流鏑馬が行われ、それは明治末年まで継続されていいたという記録がある。

建久 4 年（1193）3 月、源頼朝は狩を名目に上野から下野に出向き赤城南麓では 7 日間狩りを行い、その間大胡氏・大室氏・深栖氏・山上氏など赤城南麓の藤姓在地武士たちは厳重な警護にあたった。なお、神仏習合は奈良時代に始まり、二宮赤城神社には南南西 200 ㍍地点に神宮寺として真言宗玉蔵院が存在していた。『別当玉蔵院起立書』によれば、中興し

た円喜上人が弘安 2 年（1279）入寂しており、従って玉蔵院の開基はそれ以前に遡ることになる。神社境内には仏教施設としてかつて大沼の本地仏千手観音を収めた堂や鎌倉時代建立の五重塔が存在し、現在もその塔心礎とそれを囲むように石畳がある。なお、南北朝前期とされる宝塔（赤城塔）や江戸時代の梵鐘が存在していた。明治政府による「神仏判然令」により千年余り続いた神仏習合は分離され全国的に神社は大混乱を引き起こした。この時点には二宮赤城神社の神宮寺は大胡城へ引寺されており既に存在しなかった。

室町時代から戦乱の世となり有力後見者不在の二宮赤城神社は次第に衰退するが、社宝の納曾利面の裏に「享徳二季（1453）再興」と朱書きされており、何らかの形で再建がなされたことが窺われる。永禄2年(1559)に上杉勢の兵火で社殿を焼失し、さらに天正4年(1576) 8 月 8 日『年代記』に小田原の北条氏政の軍勢により「二宮明神社南方氏政勢打破ルナリ」と記されている。この地域は戦国時代に越後の上杉氏や古河公方足利氏さらに小田原の後北条氏などにより上州は戦乱の地となり神社はさらに衰退して行く。天正 18 年（1590）家康の関東入りに伴い、大胡へ入封した牧野康成は翌 19 年二宮赤城神社の社殿を再建した。康成は二宮赤城神社の神宮寺玉蔵院に執着し、大胡城二の丸へ引寺して城の祈願所とした。なお慶長 13 年（1608）2 月 28 日、自然発生の火災により二宮赤城神社は焼失している。

3　三夜沢赤城神社

粕川地区の湯之口地区に御殿という所があり、元三夜沢と称されている。後に現三夜沢へ移ったのが旧西宮とされている。 三代沢神社の『年代記』は貞和元年（1345）に始まり、延文元年（1356）に社の存在が記され、至徳 3 年（1386）の条に「今年二月御造立、宝堂共三所成就」と仏堂の完成が記録されている。

三夜沢赤城神社の全景（『上野名蹟図誌』より）

東宮は地蔵信仰により南北朝期頃に成立したと考えられ、応永 13 年（1406）に「東社 地蔵一千躰　西社 虚空蔵千手観音五百体ッヽ　当国邑楽郡庄司寄進」との記録が見られる。それによれば、東宮の神宮寺へ地蔵菩薩（地蔵嶽信仰）、西宮の神宮寺へ虚空蔵菩薩（小沼信仰）と千手観音（大沼信仰）で、赤城の三所明神信仰が窺える。東社の神宮寺は竜赤寺、西社の神宮寺は神光寺で、江戸時代には新里村新川（現桐生市）の善昌寺が支配していた。

永録 2 年（1559）上杉謙信は越山し、小田原を攻略するため沼田に滞在し、秋間（安中）、高山（藤岡）、倉賀野（高崎）、小幡（甘楽）、厩橋、大胡、佐貫（館林）松山（東松山）など、北条氏康方の要害地を攻略した。東宮の奈良原神主はその際、上野の諸城への手引きし忠誠を尽くし一気に謙信の信頼を受け保護された。それにより東宮の勢力は西宮を遙かに凌ぎ赤城神社全体を代表するかのような存在に至る。

天保 11 年（1840）の神社図（真隅田家蔵）

西宮は「赤城大明神」を称していたが、それに対し東宮方は正徳 4 年（1714）西方に対し「訴訟状」を出した。また、御朱印高五拾石の分配などで西宮と争うようになり前橋社寺方にも訴訟を起こした。元文 5 年（1740）、結局は両者譲らず二宮赤城神社の六弥田神主、田所神主の立会により和談している。神の昇叙は朝廷から下賜（かし）されるものであるが、江戸時代になると神祇伯（じんぎはく）白川家を圧し、吉田家が神道界を総支配するようになった。その後、宝暦 2 年（1762）東宮、明和 2 年（1765）西宮ともに正一位に昇叙している。

三夜沢赤地神社の元文年間（1736～1741）の書上には、東宮の祭神は磐筒男命（いわつつのおのみこと）を祀り、宝暦年間（1751～1764）の勧進状には西宮は大山祇命（おおやまずみのみこと）を祀っている。その後、江戸後期に盛んになった日本固有の文化や精神を明らかにしようとする“国学の思想”の影響を受け各地の神社は祭神を変えていることが窺える。例えば東宮は大己貴命（おおなむちのみこと）、西宮は豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）に変えている。14 世紀頃から東西の二社として存在してきたが明治になり合併し一社になった。唯一神明造（ゆいつしんめいづくり）の社殿は明治 2 年に建てられ、その後拝殿は明治 27 年に火災により焼失し再建され現在に至る。

昭和 11 年から神社の昇格運動が起こり、15 年頃には赤城神の考察を研究者らに依頼しそれは益々盛んとなる。神祇院はその際に祭神が豊城入彦命であることに難色を示したという。その後、大洞と三夜沢と二宮の三社合わせての昇格運動となり、昭和 19 年に国幣中社とすることに内示があった。しかし、間もなく終戦を迎え、GHQ のマッカーサの指令により、神社祭祀は宗教行事として祭政分離され神社の昇格は消滅した。

大洞赤城神社との訴訟問題

赤城神は山伏等に奉ぜられ神仏習合としての修行の場となり、地獄極楽思想の温床となり霊場化していった。赤城山上には地獄谷、六道の辻、血の池、三途の川、賽（さい）の河原、姥子（うばこ）峠、地蔵ヶ岳などの名が生じ、死霊の山の習慣が仏教と習合したのである。大洞赤城神社の『年

代記』に応永 13 年（1406）「地蔵岳地蔵造立」、寛永 19 年（1642）「塔建立」、寛政 12 年（1800）「大洞千手観音前橋ニテ開帳（後略）」とあり、大洞の開帳に参詣者が群集した。これに際し、神祇伯白川家から奉納の「上野国惣社大洞赤城神社」という額と、その添書きに記された「本宮」について、三夜沢の赤城神社神職と大洞赤城神社の神宮寺である寿延寺（六供町）との間に訴訟が起こされた。この問題は文化 13 年（1816）まで尾を引いて、三夜沢は藩の寺社役所へ訴訟文を出している。その条件は「上野国惣社大洞赤城神社」という額は内陣へ納め置くこと、「本宮」の文言の使用は寿延寺と神主社家とが合議して決めると言う事になった。

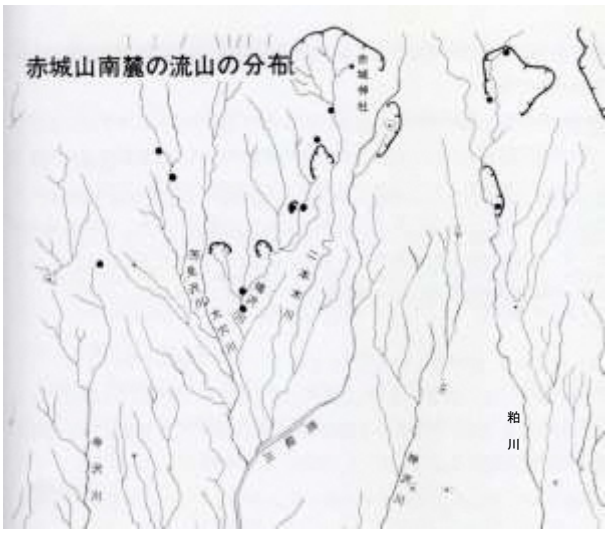
４　往古の御神幸は粕川の元三夜沢へ

月田近戸神社の『由緒記』に「当国二宮大明神赤城山御殿に毎年、御饌米を奉るに当り、当社千鹿戸大明神に御輿休み致候を古例と称す。其後建治二丙子年（1276）、祭礼行事に此赤城川辺に於て身曽気抜神事此時氏子者一同共致し、濁酒を此川に流し候。此後、此川を粕川と唱え候。文和三甲午年（1354）月田村惣氏神と相成候也」と記されており以前の御神幸は現三夜沢赤城神社ではなく、月田近戸神社で御輿休みをし御殿という所へ向かったことが記されている。では御殿といわれる場所はどこに位置しているのであろうか。

昭和 40 年 4 月 27 日、粕川村室沢字宇通地内で山火事が発生し、それによって礎石建物跡が発見された。2 カ月後、群馬大学の尾崎喜左雄博士によって「宇通遺跡」の発掘調査が行われ 12 棟の礎石を伴う建物跡が確認された。この遺跡は現在の三夜沢赤城神社の西宮の元宮地と推定された。その後、昭和 58 年から粕川村教育委員会は 9 年間にわたり宇通遺跡の再調査を実施した。その結果、講堂あるいは金堂と見られる建物のほか八角円堂などが確認され、宇通遺跡は標高 650 ㍍前後の山中に 9 世紀後半から 12 世紀中頃に存在した山岳寺院であり神社ではないことが判明した。なお、宇通遺跡から 200 ㍍ほど下ったところに御殿遺跡があり、隣接する湯之口地区に礎石建物の存在が知られ“元三夜沢”と通称されていた。月田の近戸神社『由緒記』に「二宮赤城神社の御神幸は月田の近戸神社で御輿休みし、ここから御殿へ毎年御饌米を奉る」という記述と符合し、そこが三夜沢赤城神社の西宮の故地と断定して差し支えないようである。それによると元三夜沢から現三夜沢の西宮へ移ったのは鎌倉時代から南北朝期の 14 世紀前半代と考察されている。

昭和 55 年、新里村教育委員会が行った発掘調査で地震に伴う地割れが相次いで検出された。並行して行われていた新里村「遺跡詳細分布調査」で山腹部の各所に滑落崩壊や流れ山が発見され、その原因は地震であり、それは 8 世紀後半から 9 世紀中葉ころに発生していた

ことが判明してきた。平安時代の寛平 4 年(892)宇多天皇の勅(みことのり)により菅原道真が撰修した歴史書『類聚国史(るいじゅうこくし)』の弘仁 9 年（818）の項に「九年七月。相模。武蔵。下総。常陸。上野。下野等の国地震ス。山ハ崩レ或ハ埋ルコト数里。圧死スル百姓勝(ひゃくせいまさ)ニ計ルベカラズ不可。（中略）聞クガ如クンバ。上野国等ノ境。地震(じふるい)イ災ヲ為(な)ス。水潦相仍(すいりょうあいよ)リ。人物凋損(ちょうそん)ス。(以下略)」との記述があり、発掘調査で検出された一連の地震遺跡や赤城南麓の滑落崩壊や流れ山の要因が『類聚国史』に記述された弘仁 9 年（818）の大地震発生時期と符合した。三夜沢赤城神社の北側は「弘仁の地震」発生以前は急峻な山地形で神社を創建できるような地形ではなく、後に地震の滑落崩壊土上に創建されたことも判明した。



滑落崩壊部分図（『赤城南麓の歴史地震』より）

５　旧南勢多郡の赤城神社と祭神

古代の人々は山上他界思想があり、死後の世界を近くの清浄な山頂に求めた。山開きに山へ登る習慣は山頂に行けば祖霊に出会えるという信仰から成立したもので、それから平素は生活しているムラに遥拝所（神社）を創建することになる。その神社の創立は、その地の豪族が山を崇拝し仰ぎ得る地で居住地の近くに設けたものである。その後の山は祖霊信仰から稲作栽培の水神信仰へと推移してゆくことになる。なお、山頂や山腹に神社が造られるようになるのは、仏教の影響で神仏習合による本地垂迹説(ほんじすいじゃくせつ)や仏教修験者たちの影響によるもので、大沼は千手観音、小沼は虚空蔵菩薩、地蔵岳は地蔵菩薩で三所明神となった。豊城入彦命は第 10 代崇神(すじん)天皇の皇子で東国の上毛野君、下毛野君の祖と伝えられる。しかし、豊城入彦命は親王なので地方へ出向することはなく、その孫彦狭島王(ひこさしまおう)の子御諸別王(みもろわけおう)が東国を平定し、その子孫たちが繁栄したと『日本書紀』で伝えている。その一族は大室の３二子古墳（6 世紀初頭～6 世紀後半）に埋葬されたと考察されている。二宮赤城神社は赤城南麓に繁栄した上毛野君によって創立され、律令政治下に入ると官祭となり上毛野君の祭祀権は朝廷によ

赤城山の尖峰・荒山の真南に二宮赤城神社は鎮座している

って回収されたが、実際の祭祀は継続されていたのであろう。

赤城山は山体自体を「赤城大明神」と称し尊称された。つまり、赤城信仰とは赤城山を神として崇拝していたので祭神は赤城山である。現在の祭神は後年になってから付されたものである。なお、康保４年（967）に施行された『延喜式』神名帳に「赤城名神」と記されているが「名神」は神の名称ではなく神社名を表している。江戸時代中期ころから日本の古典など、古代文化「古道」を考究する「国学」という学問が盛んになった。国学の創始者は伏見稲荷神社の祠官荷田春満で、賀茂真淵、本居宣長に至り大成したといわれている。宣長没後の門人平田篤胤は復古神道を提唱し、国粋主義や皇国史観に多大な影響を及ぼした。それは幕末の尊王運動にも同様で明治政府は「神仏分離令」を発令し、神道を国家宗教化し氏子区域と行政区域を一致させる“祭政一致”の施策に至った。明治 39 年には各集落の祭りを廃止し、村の鎮守へ集めさせる「神社合祀令」を発布した。

神社の祭神は、前述の「国学思想」により江戸時代後期以降に付され始め、明治に至り前述の理由により新たな祭神が付されたと考えられる。

旧地区	旧村名	神社名	祭　神
北　橘	真　壁	赤城神社	豊城入彦命
	八　崎	赤城神社	豊城入彦命
	下南室	赤城神社	豊城入日子命
南　橘	下小出	赤城神社	豊城入彦命
	上細井	赤城神社	豊城入彦命
	関　根	赤城神社	豊城入彦命
富士見	横　室	赤城神社	豊城入彦命
	田　島	赤城神社	豊城入彦命
	米　野	赤城神社	豊城入彦命
	大　洞	赤城神社	磐筒男命
芳　賀	五　代	赤城神社	豊城入彦命
桂　萱	亀　泉	赤城神社	大己貴命
木　瀬	上大島	近戸神社	大己貴命
	筑　井	近戸神社	大己貴命
	上増田	近戸神社	大己貴命
荒　砥	富　田	＊赤城神社	大己貴命
	荒　口	赤城神社	大己貴命
	東大室	*近戸神社	大己貴命
	新　井	赤城神社	大己貴命
	二之宮	赤城神社	大己貴命
	今　井	＊赤城神社	大穴牟遅命
大　胡	河原浜	近戸神社	大己貴命
宮　城	三夜沢	赤城神社	大己貴命 豊城入彦命
粕　川	深　津	近戸神社	大己貴命
	月　田	近戸神社	大己貴命
新　里	武　井	赤城神社	大己貴命
	板　橋	赤城神社	大国主命
黒保根	八木原	赤城神社	大己貴命
	塩　沢	赤城神社	大己貴命
	下田沢	赤城神社	大己貴命
東	花　輪	赤城神社	大己貴命
	小夜戸	赤城神社	大己貴命

旧南勢多郡の赤城神社一覧（＊は社号を変更）

豊城入彦命（豊城入日子命）　第 10 代崇神天皇の皇子で上毛野君、下毛野君の祖とされているが、豊城入彦命は親王なので地方へ出向することはなく、その孫彦狭島王の子御諸別王が東国を平定し、その子孫たちが繁栄したと『日本書紀』で伝えている。

磐筒男命　伊邪那美命は最後に生んだ火之迦具土命により陰を焼かれて黄泉国へ逝った。怒った夫伊邪那岐命は火之迦具土命の頸を斬ったとき剣先についた血が磐石に付き磐筒男命が生まれた。伊邪那岐命は伊邪那美命に逢うため黄泉国へ行く。しかし、最愛の妻は悪臭を放ち見る耐えない姿になっていた。伊邪那岐命は黄泉国ですっかり穢れた身を筑紫

の日向の橘の小戸の阿波岐原の流れで祓い清める。伊邪那岐命が左眼を洗うと天照大御神が生まれ、右目を洗うと月読尊、鼻を洗うと須佐之男命が生まれた。伊邪那岐命は、「天照大御神は高天原、月読尊は夜の国、須佐之男命は海原を私に変わって治めよ」と宣った。しかし、須佐之男命だけは約束を護らず数々の暴挙や「天の岩屋戸」事件を引き起こし、高天原から追放され降り立った所が出雲の簸川の畔であった。そこで八岐大蛇退治し天叢雲剣を得て天照大御神に献上した。櫛名田比売と結ばれ出雲国に住む。

大己貴命（大穴牟遅命） 須佐之男命から 6 代目で葦原の中つ国（高天原と黄泉国との間の日本）を治めていた。なお、大国主命・葦原色許男神・八千矛神・宇都志国玉神・大物主命など多くの名を持つことから大名持命とも言われ、禁厭（まじない）・医薬・農耕などの道を教えたとされている。天照大御神は大己貴命に、「天上・天下のすべては私が治める国」と国譲りを迫った。承諾すると孫の邇邇芸命が高千穂の峰に降り立ち、猿田毘古命が道案内し、途中で美しい姫に出会い求婚する。それは大山祇命（山を司る山の神）の姫・木花佐久夜比売命である。その後、大己貴命(大国主命)は出雲の社に祀られた。

＊ 赤城山の東南麓は大己貴命、西南麓には豊城入彦命が祀られている傾向がみられる。

◆ 近戸神社

上大島・笂井・上増田・東大室、赤堀今井地区は、古道“東道・東街道”は赤城南麓の東西方向の通行における主要な古道であったと考えられている。つまり東道は古代の官道・東山道の設置以前から東西通行の重要な役割を果たしていたことが考えられる。往時、その中心となる二宮赤城神社の東西周辺に近戸神社は存在している。集落の近くに尊崇する神社“近き仰ぎ戸”を建立したのが近戸神社である。祭政一致の時代、近戸神社は政治の中心となる周辺の“オサエ”となっていたようである。

＊ 社号変更された神社と東道付近の赤城神社

富田 上に稲荷神社、中に赤城神社、下に春日神社。明治 10 年に合併し「三柱神社」と改号した。

今井 今井沼の西北約 200m の字北三木堂に「村社赤城神社」を祀っていた。「神社合祀令」により無格社菅原神社を村社として「今井神社」と号し、今井神社古墳上に祀った。

東大室 字中神沢に村社近戸神社を祀っていた。「神社合祀令」以降に「大室神社」と社号を変え、大正 3 年 12 月 16 日に現在地へ移転した。

赤堀 今井－近戸神社は「神社合祀令」により、明治 41 年に「今井神社」と改号した。
五目牛には赤城神社跡があり、堀下には赤城神社、曲沢には赤城神社が鎮座している。

引用参考文献 『上野国神社明細帳』、『前橋市史 1 』、『宮城村誌』、『粕川村誌』、『前橋の歴史』、『赤堀村誌』、『赤城の神』、『勢多郡神社誌』、『古事記』、『赤城南麓の歴史地震』、『上野国神名帳の研究』、『日本神祇由来事典』

「わらべ唄と唱歌と童謡の歴史」

令和３年３月 27 日（土）

城南公民館 １階ホール

内 田 憲 治

１．江戸時代のわらべ唄

子供たちの遊び唄として昔から唄い継がれてきた「わらべ唄」は現代の童謡に近いものであった。子どもたちが遊びながら日常生活の中で、口伝えに唄い継がれてきた。従って、作詞者や作曲者は不詳であり子供たちの遊び仲間などによって伝承され、自由に作りかえたりされるが、伝統的な要素がきわめて強い。また、「数え唄」を唄いながら仲間たちと「お手玉」などで遊びながら伝わってきたもので、大人になって「わらべ唄」の歌詞を見ると、その表現の豊かさや奥深さに驚かされることが少なくない。「わらべ唄」は大人になってからも、ふと口ずさむと童心に帰れる心の故郷とも言えるのである。

数え唄

一 いちじく
二 にんじん
三 さんしょ
四 しいたけ
五 ごぼうに
六 むくろじゅ
七 ななくさ
八 はったけ
九 きゅうり
十 とうがん

◇『かごめかごめ』 この歌の原形や原曲が確認できる最も古い現存の文献は、文政３年（1820）頃に編纂された『竹堂随筆（ちくどうずいしゅう）』という「わらべ唄集」とされている。江戸時代には歌詞の「つるつるつっぺぇった」であったが、それが明治時代以降には「鶴と亀が滑った」の歌詞に変わっている。その「つるつる」については、鳥のツル（鶴）ではなく「物がするすると引っ張られる」という様子の擬態語である。「つっぺぇった」は「つっぱいた」が変化したもので、「引っ張る、突っ込む」といった意味があるようである。鬼は目を隠して中央に座り、その周りを他の子が輪になって唄いながら回る。唄い終わった時に鬼は自分の真後ろ（つまり後ろの正面）に誰がいるのかを当てながら遊ぶ。

かごめかごめ

かァごめかごめ
かーごの中の鳥は
いついつ出やる
夜あけの晩に
つるつるつっぺぇった
鍋の鍋の底ぬけ
底ぬいてーたーァもれ
【現代版】
かごめかごめ
籠の中の鳥は
いついつ出やる
夜明けの晩に
鶴と亀が滑った
後ろの正面だあれ？

◇『にらめっこ（だるまさん）』 「だるま」とは、およそ 1600 年前にインドの王子として生まれた。国王であった父が亡くなり仏門に入り師匠から付けられた名前が達磨（だるま）であった。その後、中国へ布教の旅にでた達磨大師が落ち着いた先は洛陽（らくよう）の少林寺であった。その寺院の裏手にあった洞窟で９年間、赤い袈裟（けさ）姿で岸壁に向かって座禅を組み続けた。９年間壁に向かって座禅し「面壁（めんぺき）九年」により悟りを開いたという。壁のように動ぜぬ境地で真理を観

にらめっこ

だるまさん だるまさん
にらめっこしましょ
笑うと負けよ
あっぷっぷ

ずることにより、達磨大師は「決して動じず」、例え笑わそうとしても「決して笑わない人物」の象徴となり、子供たちの遊び唄「にらめっこ」の題材になったと考えられる。

通りゃんせ

一通りゃんせ 通りゃんせ
ここはどこの 細通じゃ
天神さまの 細道じゃ
ちっと通して 下しゃんせ
御用のないもの 通しゃせぬ
二この子の七つの お祝いに
お札を納めに まいります
行きはよいよい 帰りはこわい
こわいながらも
通りゃんせ 通りゃんせ

◇『通りゃんせ』　神奈川県小田原市国府津（こうづ）菅原神社や、埼玉県川越市の三芳野神社が舞台であるという説があり、共に発祥の碑がある。このほか関所を舞台とするという説（出立（しゅったつ）は楽だが帰還の際は厳しく調べられるという）もある。この歌詞の意味には神隠し伝説や人柱、埋蔵金伝説の関連付けをする考え方を説く人もいる。

花いちもんめ

勝ってうれしい 花いちもんめ
負けてくやしい 花いちもんめ
となりのおばさんちょっと来ておくれ
鬼がいるから行かれない
お釜かぶってちょっと来ておくれ
釜がないから行かれない
布団かぶってちょっと来ておくれ
布団破れて行かれない
あの子がほしい あの子じゃわからん
この子がほしい この子じゃわからん
相談しよう そうしよう

◇『花いちもんめ』　「もんめ」とは、貨幣として用いる銀の重量を表す単位で、一匁（いちもんめ）は約 3.75 グラム程度である。例えば、花を一匁だけ買う際に、値段を負けて悲しい売り手側と、安く買ってうれしい買い手側の様子が唄われているとされている。一説には、貧乏な家の子供が口減らしの為に人買いに一匁で買われていく悲しい唄として解釈されていることもあるという。

ずいずいずっころばし

ずいずいずっころばし
ごまみそずい
茶壷におわれて
どっぴんしゃん
ぬけたら どんどこしょ
俵のねずみが
米食って ちゅう
ちゅう ちゅう ちゅう
おっ父さんがよんでも
おっ母さんがよんでも
いきっこなしよ
いどのまわりで
お茶碗かいたの だぁれ

◇『ずいずいずっころばし』　江戸時代には、京都府宇治市の名産品である宇治茶を徳川将軍家に献上するため、茶を詰めた茶壺を運ぶ行列が行われた。大名行列同様に街道筋（東海道、中山道）の住民は土下座などを強要されたことから「お茶壺道中」と呼ばれ、寛永 10 年（1633）から明治維新に至る 245 年間に亘り続けられていた。庶民が行列の前を横切ろうものなら、男女や子供を問わず「手打ち」にされる身分制度の厳しい時代であった。「茶壷が来たらピシャンと戸を閉めて、誰が呼んでも外に出てはいけない」という戒めの意が込められているという。

うさぎ

うさぎ うさぎ
なにを見て はねる
十五夜 お月さま
見て はねる

◇『うさぎ』　江戸時代から唄い継がれて来たとされ、十五夜のお月様を見て跳ねるうさぎの様子が描かれている。明治 25 年（1892）の『小学唱歌 』で初めて教材として掲載された。当時の歌詞は「なに**を**見てはねる」であったが、昭和 16 年（1941）の『ウタノホン』から、"**を**"の文字を抜いた歌詞になったとされている。

あんたがたどこさ
あんたがたどこさ
肥後さ 肥後どこさ
熊本さ 熊本どこさ
船場さ 船場山には
狸がおってさ
それを猟師が鉄砲で
撃ってさ 煮てさ
焼いてさ 食ってさ
それを木の葉で
ちょいとかぶせ

◇『あんたがたどこさ』　幕末に、薩長連合軍が倒幕のために江戸へ向かって川越の仙波山に進行していたときのこと、付近の子供たちが「あんた達はどこから来たの？」と尋ねた様子が歌詞に描かれているという。川越市には「仙波山」があり、仙波山には徳川家康公を祀った仙波東照宮が存在する。薩長連合軍が徳川幕府を倒すため江戸へ侵攻してきた。徳川家康は江戸幕府を開いた象徴的な存在で、ちなみに徳川家康は「狸」の俗称で知られている。「船場山には狸がおってさ」の部分は「仙波山」と歌詞を書き変えても話の筋が通ることになる。唄そのものを楽しみながら、遊びの中で唄われる遊び唄として機能していた。

２．明治の学校制度による唱歌

ちょうちょ
ちょうちょ
ちょうちょ
菜の葉にとまれ
菜の葉に飽いたら
桜にとまれ
桜の花の
花から花へ
とまれよ遊べ
遊べよ とまれ

明治５年（1872)、政府は全国に交付した「学制」により日本は初めて近代的な学校制度が定められた。欧米の学校制度を参考として行うことになった。しかし、今まで存在していなかった新たな学校教育のなかで、日本には音楽教育として使えるような音楽は存在しなかった。そのため急ぎ西洋音楽を取り入れることとなり、ドイツやスコットランドなどの外国民謡や讃美歌などを翻訳して唱歌とする、いわゆる翻訳唱歌が登場した。翻訳唱歌の例として『ちょうちょう』(詞：野村秋足、曲：ドイツ民謡）や『見わたせば』(「戦争に影響を受けた歌」10 頁の項を参照）や卒業式には欠かせない『仰げば尊し』は、後年になっても思い出の歌として心に残る歌であるが作詞者と作曲者は不詳であった。しかし、今から 10 年前の平成 23 年（2011）に一橋大学の桜井雅人教授により、アメリカで 1871 年（明治 4 年）に作曲された卒業の歌『Song for the close of school』であることが究明された。しかし、未だ作詞者は不詳である。後年に童謡として親しまれている唱歌もこの頃に多く誕生している。

仰げば尊し
仰げば尊し
我が師の恩
教の庭にも
はや幾年と
思えばいと疾し
この年月
今こそ別れめ
いざさらば

数え歌
一番はじめは一の宮
二は日光中禅寺
三は讃岐の金比羅さん
四は信濃の善光寺
五は出雲の大社
六つ村々鎮守様
七つ成田の不動様
八つ八幡の八幡宮
九つ高野の高野山
十は東京招魂社
（靖国神社）

明治 2 年（1869)、戊辰戦争の戦没者の霊を祀るため、明治政府により「東京招魂社」が創祀され、後に各府県にも国家的な統制を受けて「招魂社」が創祀された。明治 12 年（1879）に政府によって「東京招魂社」は「靖国神社」に、2 年後には全国の「招魂社」は「護国神社」に改称された。この『数え歌』の「十 は「東京招魂社」と

あり、明治 12 年の「靖国神社」との社号変更を考慮すると、『数え歌』は明治 2 年（1869）から 12 年（1879）の間に作られたことになる。

明治 10 年（1877）から 15 年（1882）にかけて、東京女子師範学校の付属幼稚園のために宮内省式部寮雅楽部が作成した『唱歌集』が刊行された。しかし、雅楽由来の古めかしいメロディで、歌詞も古典的なため、幼稚園児が歌うには難解なものであった。掲載歌のうち、現代では日本国家となっている『君が代』（詞：『古今和歌集』、曲：宮内省雅楽部）は当時国歌ではなく、国歌に制定されたのは昭和 5 年（1930）である。

君が代
君が代は
千代に八千代に
さざれ石の
いわおとなりて
苔のむすまで

蛍の光
蛍の光
窓の雪
書よむ月日
重ねつつ
いつしか年も
すぎの戸を
明けてぞ
けさは
別れゆく

明治 15 年（1882）から 17 年（1884）にかけて『小学唱歌集』が文部省音楽取調掛により翻訳唱歌集が編纂された。欧米の進んだ音楽教育を取り入れるべく、ドイツやスコットランドなどの外国民謡を原曲とする海外由来の唱歌が数多く取り入れられた。日本の唱歌の歴史はここから始まったと言っても過言ではない。著名な曲としては『蛍の光』（詩：稲垣千穎（ちかい）、曲：スコットランド民謡）、『野ばら』（詞：近藤朔風（さくふう）、曲：ヴェルナー）、『庭の千草』（詞：里見義（さとし）、曲：アイルランド民謡）、『霞か雲か』（詞：加部厳夫、曲：ドイツ民謡）などがある。

野ばら
わらべは見みたり
野なかのばら
清らに咲ける
その色めでつ
あかずながむ
くれないにおう
野なかのばら

庭の千草
庭の千草も
むしのねも
かれてさびしく
なりにけり
ああしらぎく
ああ白菊
ひとりおくれて
さきにけり

明治 21 年（1888）から 25 年（1892）にかけて作詞家の大和田建樹（おおわだたけき）と作曲者の奥好義（おくよしいさ）によって『明治唱歌』が出版された。掲載曲は海外の民謡やクラシック音楽（歌曲）を原曲とした翻訳唱歌が大半を占めている。現代でも著名な曲としては『故郷の空』（詞：大和田建樹（たけき）、曲：スコットランド民謡）、『故郷の人々（スワニー川）』（詞：大和田建樹（たけき）、曲：アメリカのフォスター）などがある。明治 26 年（1893）に公布された『祝日大祭日唱歌』は、文部省が祝祭日の祝儀のための唱歌集で、「年の始めのためしとて」の歌い出しで著名な『一月一日（いちがついちじつ）』（詞：千家尊福（せんげたかとみ）、曲：上真行（うえさねみち））で『紀元節』（詞：高橋正

故郷の空
夕空はれて
秋風吹き
月影落ちて
鈴虫鳴く
思えば遠し
故郷の空
ああ わが父母
いかにおわす

故郷の人々（スワニー川）
遥かなるスワニー川
その下 なつかしの彼方よ
わがふるさと
旅空のあこがれ 果てなく
思い出ずふるさと
父母います

一月一日
年の始めの
ためしとて
終りなき世の
めでたさを
松竹たてて
門ごとに
祝う今日こそ
楽しけれ

紀元節
雲にそびゆる
高千穂の
高嶺おろしに
艸（くさ）も木も
なびきふしけん
大御世を
仰ぐけふこそ
楽しけれ

風、曲：伊藤修二）で明治 6 年（1873）、2 月 11 日（旧暦 1 月 1 日）を神武天皇の即位日として制定したが、戦後 GHQ により廃止され昭和 41 年に「建国記念日」として復活した。『天長節』（詞：黒川真頼、曲：奥吉義）は、明治元年（1868）に制定されたが、第二次大戦後には「天皇誕生日」と改称された。

天長節

今日の吉き日は大君の
うまれたまひし 吉き日なり
今日の吉き日は みひかりの
さし出たまひし 吉き日なり
ひかりあまねき 君が代を
いはへ諸人 もろともに
めぐみあまねき君が代を
いはへ諸人 もろともに

明治 22 年（1889）から 34 年（1901）に尋常中学校向けの音楽教材として、東京音楽学校の編纂により『中等唱歌集』が出版された。掲載曲は、海外の民謡やクラシック音楽が原曲となっており、その中で『埴生の宿』（詞：里見義、曲：イギリスのビショップ）が今日でも著名である。続いて明治 34 年（1901）には東京音楽学校による尋常中学校向け唱歌集の第二弾『中学唱歌』が出版された。当時、東京音楽学校には滝廉太郎が在籍しており、西洋音楽を取り入れた日本独自の歌曲が生まれたが惜しむらくは 23 歳で夭折している。代表曲ともいえる『花』（詞：武島羽衣、曲：滝廉太郎）、『荒城の月』（詞：土井晩翠、曲：滝廉太郎）および『箱根八里』（詞：鳥居忱、曲：滝廉太郎）は、『中学唱歌』向けに作られた楽曲である。

荒城の月

春 高楼の 花の宴
めぐる盃 かげさして
千代の松が枝 わけ出でし
むかしの光 いまいずこ

花

春のうららの隅田川
のぼりくだりの船人が
櫂のしずくも花と散る
眺めを何に喩うべき

箱根八里

箱根の山は 天下の険
函谷関も 物ならず
万丈の山 千仞の谷
前に聳え 後に支う
雲は山をめぐり
霧は谷をとざす
昼猶闇き 杉の並木
羊腸の小径は 苔滑か
一夫関に当るや
万夫も開くなし
天下に旅する 剛毅の武士
大刀腰に 足駄がけ
八里の岩ね 踏み鳴らす
斯くこそありしか
往時の武士（もののふ）

雪

雪やこんこ 霰やこんこ
降つては降つては
ずんずん積る
山も野原も 綿帽子かぶり
枯木残らず 花が咲く
雪やこんこ 霰やこんこ
降つても降つても
まだ降りやまぬ
犬は喜び 庭駈けまはり
猫は炬燵で丸くなる

金太郎

まさかりかついで 金太郎
熊にまたがり お馬のけいこ
ハイシィドウドウ
ハイドウドウ
ハイシィドウドウ
ハイドウドウ

紅葉

秋の夕日に照る山もみじ
濃いも薄いも数ある中に
松をいろどる楓や蔦は
山のふもとの裾模様

浦島太郎

昔 昔 浦島は
助けた亀に連れられて
龍宮城へ来て見れば
絵にもかけない美しさ

桃太郎

桃太郎さん 桃太郎さん
お腰につけた 黍団子
一つわたしに 下さいな

文部省による教科書『尋常小学唱歌』では『かたつむり』（詞：吉丸一昌、曲：文部省唱歌）、『雪（雪やこんこ）』（文部省唱歌）、や『紅葉』（詞：高野辰之、曲：岡野貞一）など、日本人の作曲家による日本独自のメロディと歌詞が用いられた唱歌が掲載され、その多くが今日でも童謡や愛唱歌として歌われ続けている。『桃太郎』（詞：田辺友三郎、曲：納所弁次郎）、

『金太郎』（詞：石原和三郎、曲：田村虎蔵）、『浦島太郎』（詞：石原和三郎、曲：田村虎蔵）、『花咲かじいさん』（詞：石原和三郎、曲：田村虎蔵）、『うさぎとかめ』（詞：石原和三郎、曲：納所弁次郎）といった日本の昔ばなしの歌も誕生し、『春が来た』（詞：高野辰之、曲：岡野貞一）なども発表されている。アメリカの曲『旅愁』（詞：犬童球渓（いんどうきゅうけい）、曲：オードウェイ）などは外国曲も現代でも愛唱されている。なお、石原和三郎は勢多郡東村花輪（現・みどり市東町花輪）に生まれた。明治 24 年（1891）に群馬師範を卒業し、その後に郷里の花輪小学校校長に拝命されている。明治 27 年（1894）、東京高等師範学校附属小学校（現・筑波大学附属小学校）訓導に転出した。後に冨山房に入社し坪内逍遥のもとで『小学国語読本』の編纂に携わり、『幼年唱歌』を出版し多くの唱歌作成に貢献した。その功績により石原和三郎は幼年唱歌の父と称された。

花咲かじいさん
うらのはたけで
ポチがなく
しょうじきじいさん
ほったれば
おおばん こばんが
ザクザクザクザク

春が来た
春が来た 春が来た
どこに来た
山に来た 里に来た
野にも来た

うさぎとかめ
もし もし かめよ
かめさんよ
せかいの うちに
おまえほど あゆみの
のろい ものはない
どうして そんなに
のろいのか

旅 愁
更けゆく秋の夜
旅の空の
わびしき思いに
一人悩む
恋しや故郷
懐かし父母
夢路にたどるは
故郷の家路
更けゆく秋の夜
旅の空の
わびしき思いに
一人悩む

４．童謡が生まれた大正時代

明治 5 年（1872）、「学制」が発布された時、小学校の音楽教科の中で歌われた唱歌は外国の楽曲に翻訳の歌詞を付した唱歌が主流であったので、必ずしも子供の心に触れる歌とは言えなかった。大正時代になるとそれから脱却し日本人の作曲家による日本独自のメロディと作詞家による歌詞が用いられるようになり、子供の心に触れるどうようが数多く誕生した。

明治 44 年（1911）から大正 3 年（1914）に『春の小川』（詞：高野辰之、曲：岡野貞一）、『早春賦（そうしゅんふ）』（詞：吉丸一昌、曲：中田章）、『どんぐりころころ』（詞：青木存義（ながよし）、曲：梁田貞（やなだただし））、『故郷』（詞：高野辰之、曲：岡野貞一）など『文部省唱歌』が刊行された。大正 12 年（1923）には『背くらべ』（詞：海野厚、曲：中山晋平）が『子供達の歌 第 3 集』に発表されている。

春の小川
春の小川は
さらさら行くよ
岸のすみれや
れんげの花に
すがたやさしく
色うつくしく
咲けよ咲けよと
ささやきながら

早春賦
春は名のみの風の寒さや
谷の鶯 歌は思えど
時にあらずと声も立てず
時にあらずと声も立てず

どんぐりころころ
どんぐり ころころ
どんぶりこ
おいけにはまって
さあたいへん
どじょうがでてきて
こんにちは
ぼっちゃん
いっしょに
あそびましょう

日本は日清・日露戦争を経て、その後は第一次世界大戦でドイツに宣戦布告し、領土と

していた中国の赤道以北の南洋諸島や青島(ちんたお)を占領していた。当時は軍事力を増すための体制維持を謀るため、子どもの感性や心に寄り添うような歌は乏しかった。

背くらべ
柱のきずは
おととしの
五月五日の
背くらべ
ちまきたべたべ
兄さんが
計ってくれた
背のたけ
昨日くらべりゃ
何のこと
やっと羽織の
紐のたけ

朧月夜
菜の花畠に
入り日薄れ
見わたす山の端
霞ふかし
春風そよふく
空を見れば
夕月かかりて
におい淡し

冬景色
さ霧消ゆる湊江の
舟に白し 朝の霜
ただ水鳥の声はして
いまだ覚めず 岸の家

故郷
一兎追いしかの山
小鮒釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき故郷
二如何にいます父母
恙なしや友がき
雨に風につけても
思いいずる故郷

浜辺の歌
あした浜辺を
さまよえば
昔のことぞ
忍ばるる
風の音よ
雲のさまよ
寄する波も
貝の色も

童話作家の鈴木三重吉は当時の唱歌を厳しく批判し、子供には芸術として真価ある純麗な童話と童謡が必要であると主張した。それに共感した若き作家や詩人や画家たちが集まり、大正 7 年（1918）7 月 1 日に児童雑誌『赤い鳥』が刊行され童話と童謡の歴史的な幕開けとなった。『赤い鳥』に参加した層は広く、詩人では北原白秋、西条八十、野口雨情、三木露風など 10 人余であった。新しい童謡の誕生は主に詩人の積極的な取り組みによって実現し、それに東京音楽学校で学んだ若い 20 代の作曲家が参加し、新しい子どもの歌が本格的に誕生した。それは成田為三、草川信、弘田龍太郎、中山晋平、本居長世、ドイツ留学から戻った山田耕筰に本格化することになった。日本の伝統音楽は雅楽など 5 音音階(ド、レ、ミ、ソ、ラ)であったが、外国留学から帰った近衛秀麿や山田耕筰たちが 7 音階（ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ）にしようと努力し、も大きな影響を与えた。

カナリヤ
一唄を忘れた カナリヤは
うしろの山に すてましょか
いえいえそれは なりませぬ
二唄を忘れた カナリヤは
背戸のこやぶに うめましょか
いえいえそれも なりませぬ
三唄を忘れた カナリヤは
柳のむちで ぶちましょか
いえいえそれは かわいそう
四唄を忘れた カナリヤは
ぞうげの舟に 銀のかい
月夜の海に 浮かべれば
忘れた歌を 思い出す

赤い靴
一赤い靴はいてた
女の子異人さんに
つれられて行っちゃった
二横浜の埠頭（はとば）から
船に乗って異人さんに
つれられて行っちゃった
三今では青い目に
なっちゃって異人さんの
お国にいるんだろう

夕焼け小焼け
夕焼け小焼けで
日が暮れて
山のお寺の鐘がなる
おてておつないで
みなかえろう
からすといっしょに
かえりましょ

そして、北原白秋、野口雨情、西条八十らの文学的な詩による文学童謡（創作童謡）が次々と発表された。この頃の童謡は『冬景色』（詞・曲：不詳）、『浜辺の歌』（詞：林古渓、曲：成田為三）、『朧月夜(おぼろづきよ)』（詞：高野辰之、曲：岡野貞一）、『カナリヤ』（詞：

七つの子
一からすなぜ鳴くの
からすは山に
可愛い七つの
子があるからよ
二可愛い可愛いと
からすは鳴くの
可愛い可愛いと
なくんだよ
三山の古巣に
行って見て御覧
丸い眼をした
いい子だよ

証城寺の狸囃子

証 証 証城寺
証城寺の庭は
つ つ 月夜だ
みんな出て
来い来い来い
おいらの友だちゃ
ぽんぽこ ぽんの
ぽん

雨降りお月さん

雨降りお月さん雲の陰
お嫁にゆくときゃ誰とゆく
一人で傘(からかさ)
さしてゆく
傘ないときゃ 誰とゆく
シャラシャラ
シャンシャン
鈴つけた
お馬にゆられて
ぬれてゆく

青い眼の人形

青い眼をしたお人形は
アメリカ生まれのセルロイド
日本の港へついたとき
いっぱいなみだをうかべてた
わたしは言葉がわからない
迷子になったらなんとしょう
やさしい日本の嬢ちゃんよ
なかよくあそんでやっとくれ
なかよくあそんでやっとくれ

西条八十、曲：成田為三)、『赤い靴』(詞：野口雨情、曲：本居長世)、『七つの子』(詞：野口雨情、曲：本居長世)、『青い眼の人形』(詞：野口雨情、曲：本居長世)、『夕焼け小焼け』(詞：中村雨紅、曲：草川信)、『雨降りお月さん』(詞：野口雨情、曲：中山晋平)、『証城寺の狸囃子』(詞：野口雨情、曲：中山晋平）など文学的で格調の高い作品が多い。

5．昭和の戦前・戦中における唱歌と童謡

大正 12 年（1923）に発生した関東大震災の処理のため震災手形が膨大な不良債権化し景気に悪影響を及ぼしていた。昭和 4 年（1929）以降は世界大恐慌になり、それにより日本経済は益々危機的状態に陥った。そんな世相の中で昭和 2 年（1927）に『赤とんぼ』(詞：三木露風、曲：山田耕筰)、『この道』(詞：北原白秋、曲：山田耕筰)、その後『かもめの水兵さん』(詞：竹内俊子、曲：河村光陽)、『こいのぼり』(詞：近藤宮子、曲：不詳)、『月の沙漠』(詞：加藤まさを、曲：佐々木すぐる)、『うれしいひなまつり』(詞：山野三郎、曲：河村光陽)、『椰子の実』(詞：島崎藤村、曲：大中 寅二）や、さらに桃の節句や端午の節句など、子供の年中行事に関連した童謡もこの頃に発表されている。

赤とんぼ

一 夕やけ こやけの 赤とんぼ
負われて見たのは いつの日か
二 山の畑の 桑の実を こかごに
つんだは まぼろしか
三 十五で ねえやは 嫁にゆき
お里の たよりも たえはてた

この道

この道は いつかきた道
ああ そうだよ
あかしやの花が咲いてる

月の沙漠

月の沙漠をはるばると
旅の駱駝がゆきました
金と銀との鞍置いて
二つならんでゆきました

椰子の実

名も知らぬ
遠き島より
流れ寄る
椰子の実一つ
故郷の岸を
離れて汝はそも
波に幾月

こいのぼり

やねよりたかい
こいのぼり
おおきいまごいは
おとうさん
ちいさいひごいは
こどもたち
おもしろそうに
およいでる

かもめの水兵さん

かもめの水兵さん
ならんだ水兵さん
白い帽子 白いシャツ
白い服 波にチャップ
チャップ うかんでる

うれしいひなまつり

あかりをつけましょ
ぼんぼりに
おはなをあげましょ
もものはな
ごにんばやしの
ふえたいこ
きょうはたのしい
ひなまつり

しかし、昭和 6 年（1931）に日本軍は中国東北部の柳条湖（りゅうじょうこ）の鉄道爆破が契機となり、中国との 15 年戦争が始まり翌年に満

仲よし小道

仲よし小道は どこの道
いつも学校へ みよちゃんと
ランドセルしょって 元気よく
お歌をうたって 通う道

かわいい魚屋さん

かわいい かわいい 魚屋さん
ままごとあそびの 魚屋さん
今日はおさかな いかがでしょ
お部屋じゃ 子供のお母さん
今日はまだまだ いりません

あのこはたあれ

あのこはたあれ
たれでしょね
なんなんなつめの
はなのした
おにんぎょうさんと
あそんでる
かわいい
みよちゃんじゃ
ないでしょか

おうま

おうまのおやこは
なかよしこよし
いつでもいっしょに
ぽっくりぽっくりあるく

お猿のかごや

エッサ エッサ エッサホイ サッサ
お猿のかごやだ ホイサッサ
日暮れの山道 細い道
小田原提灯ぶらさげて
ソレ ヤットコ ドッコイ
ホイサッサ ホーイ
ホイホイ ホイサッサ

たきび

かきねの かきねの まがりかど
たきびだ たきびだ おちばたき
「あたろうか」「あたろうよ」
きたかぜぴいぷう ふいている

森の水車

緑の森の彼方から
陽気な歌が聞えます
あれは水車のまわる音
耳をすましてお聞きなさい
コトコトコットン
コトコトコットン
ファミレドシドレミファ
コトコトコットン
コトコトコットン
仕事にはげみましょう
コトコトコットン
コトコトコットン
いつの日か
楽しい春がやって来る

州国を建国し、国策として満州への開拓移民を推進した。また南下するソ連軍と対峙(たいじ)するため軍事体制はさらに増大した。緊迫した世相の昭和 12 年以降『かわいい魚屋さん』(詞：加藤省吾、曲：山口保治)、『あの子はたあれ』(詞：細川雄太郎、曲：海沼實)、『仲よし小道』(詞：三苫(みとま)やすし、曲：河村光陽)、『お猿のかごや』(詞：山上武夫、曲：海沼實）などリズミカルで可愛いい歌が発表されている。

やがて日本は東南アジアから太平洋諸島にまで戦域を拡大し、昭和 16 年（1941）12 月 8 日にハワイのオアフ島南岸のアメリカ海軍根拠地（真珠湾）へ日本海軍が奇襲攻撃を行い太平洋戦争が勃発した。太平洋戦争に突入した頃に『おうま』(詞：林柳波、曲：松島つね)、『たきび』(詞：巽聖歌(たつみせいか)、曲：渡辺茂)、『森の水車』(詞：清水みのる、曲：米山正夫）などが発表されている。

6．戦争に影響を受けた歌

国内の軍国主義体制が強化されるようになると、児童の歌にまで影響を及ぼすようになり、曲はそのままで歌詞を変えて歌われ、その当時の風潮に相反するような歌は発売を禁止するなどの措置を受けるようになった。明治 14 年（1881）の『見わせば』は、明治 27 年（1894）に日清戦争が勃発すると、勇ましい作詞になり『戦闘歌』に生まれ変わった。太平洋戦争の終結から 2 年経った昭和 22 年（1947)、小学一年生向けに刊行された最初の音楽の教科書『一年生のおんがく』に『むすんでひらいて』(詞：不詳）が掲載されていた。

この歌は明治時代の唱歌『見わたせば』として掲載され、曲はイギリスの讃美歌であり、詞は『古今和歌集』に収められている素性法師（桓武天皇のひこ孫）の和歌を参考に柴田清熙が作詞している。なお、日本は明治28年（1895)、日清戦争に勝利すると軍歌集『大東軍歌』に鳥居忱の作詞より『戦闘歌』として掲載されている。

アムール川の流血や
アムール川の流血や
氷りて恨結びけん
二十世紀の東洋は
怪雲空にはびこりつ

歩兵の本領
万朶の桜か襟の色
花は吉野に嵐吹く
大和男子と生まれなば
散兵戦の花と散れ

メーデーの歌
聞け万国の労働者
轟わたるメーデーの
示威者に起る足取りと
未来を告ぐるときの声

赤城団応援歌
赤城おろしに鍛えたる
絆は強く進み行く
向かう所に敵はなし
我ら赤城の健団児

見わたせば
見渡せば 青やなぎ
花桜 こきまぜて
みやこには 道もせに
春の錦をぞ
佐保姫の 織なして
降る雨に そめにける

戦闘歌
見渡せば 寄せて来る
敵の大軍 面白や
スハヤ戦闘始まるぞ
イデヤ人々 攻め崩せ
弾丸込めて 撃ち倒せ
敵の大軍 撃ち崩せ

むすんでひらいて
むすんで ひらいて
てをうって むすんで
またひらいて てをうって
そのてを うえに
むすんで ひらいて
てをうって むすんで

明治34年（1901）に発表された旧制第一高等学校（現東京大学）東寮の寮歌は、前年に勃発した「アムール川事件（帝政ロシアによる清国民大量虐殺)」に端を発した、東洋の危機意識とロシアに対する国民的感情を歌っている。それは『アルール川の流血や』（詞：塩田環、曲：栗林宇一）で、後に加藤明勝が作詞し陸軍幼年学校の『歩兵の本領』という替え歌になった。大正11年（1922）の第3回のメーデーで詞を替えて『メーデーの歌』として行進時に歌われた。なお、全国の小・中学校などでこの曲を借りて詞を付け運動会の応援歌として盛んに使われた。群馬県では、運動会などに際し生徒数に応じて赤城団（赤)・榛名団（緑)・妙義団（黄)・浅間団（白）に分かれ競技得点を競い、それは昭和40年代以降まで続いていた。

大正10年（1921）に発表された『青い眼の人形』は大変に好評を得ていた。大正12年9月1日に関東大震災が発生し昼食の準備時間であったことから大火災となり京浜地帯は壊滅的な打撃を受けた。多くの被害が出たことによりアメリカから義援金などが沢山に贈られてきた。その支援に対し答礼使節団が組織され、『青い眼の人形』の作曲者である本居長世は団長として渡米してお礼の講演を行った。その使節団には『青い眼の人形』を歌って評価されていた本居長世の娘みどりも同行していた。

青い眼の人形
青い眼をしたお人形は
アメリカ生まれのセルロイド
日本の港へついたとき
いっぱいなみだをうかべてた
わたしは言葉がわからない
迷子になったらなんとしよう
やさしい日本の嬢ちゃんよ
なかよくあそんでやっとくれ
なかよくあそんでやっとくれ

昭和2年（1927)、アメリカから日米親善の友情人形として「青い眼の人形」が12,739体贈られてきた。しかし、その後は日米が戦争状態になった時点で敵国の人形というこ

とになった。当時、「青い眼の人形」の措置についてアンケートをとった結果は、「焼いてしまえ－133 人、破棄する－89 人、送り返せ！－44 人、目のつく所へ置いて毎日いじめる－31 人」という結果であった（昭和 18 年 2 月 20 日―毎日新聞）。なお、『たきび』（詞：巽聖歌(たつみせいか)、曲：渡辺茂）の歌は、焚火をするとその煙によって米軍戦闘機の攻撃目標になる。それから『森の水車』（詞：清水みのる、曲：米山正夫）は、歌詞の「ファミレド　シドレミファ」は外国語であるということで禁止された。

＊ちなみに学校教育で「唱歌」は昭和 16 年（1941）から「音楽」と改称された。

童謡ではないが『人形の家』（詞：なかにし礼、曲：川口真）という歌謡曲が昭和 44 年（1969）に発表された。従来の歌謡曲の歌詞とは全く異なる強烈な内容で奥行きを感じる詞であった印象が残っている。中西禮三(れいぞう)（なかにし礼）の両親は国策により中国大陸へ渡り、中国東北部満州の牡丹江(ぼたんこう)で酒造業を営み成功した。禮三は牡丹江(ぼたんこう)で生まれ両親と兄と妹との 5 人家族で兄は学徒出陣で陸軍の特別操縦見習士官として特攻隊に配属され出征していた。昭和 7 年（1932)、日本は「満州国」という傀儡(かいらい)国家を建国し国策として満蒙(まんもう)開拓移民を募り、青少年義勇軍を含め約 32 万人が入植し帰国できたのは 11 万人余りであった。

昭和 20 年（1945）8 月 9 日、日本の敗戦が決定的になるとソ連は「日ソ中立条約」を一方的に破棄し、満州と北方領土へ侵攻してきた。満州の日本人は生命の危機にさらされ、父はすでに亡くなっており母と妹と禮三の 3 人はようやく軍用列車に乗り込みハルビンへ向かった。その途中でソ連機からの攻撃を受け、「椅子の下へ！」の母の言葉に夢中で椅子の下へ潜った。激しい機銃掃射の弾丸は列車のあちこちの天井や床を穴だらけにし、多くの人達が銃撃で亡くなり生きた心地はしなかった。禮三たちはようやくハルビンへ着いたが、苦しい 1 年 2 か月の避難所生活を余儀なくされた。日本への引き揚げが決まり出港する葫蘆島(ころとう)へ着いた時、日本政府の重光葵(まもる)外務大臣から訓電(くんでん)（電報での命令）が届いた。「今、日本は近代まれにみる飢饉にあり、君達を養う力はない。そういう状況なのでそちらで生きよ」と宣言され、大人たちは泣き崩れ禮三は子供心に日本国に見捨てられた、と感じた。ようやく本土へ帰還できたとき禮三は 8 歳だった。この時の思いは生涯忘れることなく脳裏に刻まれ、その思いを恋の歌として『人形の家』を作詞

人形の家

顔も見たくないほど
あなたに嫌われるなんて
とても信じられない
愛が消えた今も
埃にまみれた人形みたい
愛されて捨てられて
忘れられた部屋のかたすみ
私はあなたに命をあずけた

人形の家（歌詞の真意）

顔も見るのも嫌だなんて言われ
まさか本国の日本に嫌われるなんて
私はとても信じられない
日本国から私への愛が消えた今は
まるで私は埃まみれの人形みたい
あんなに愛していると言っていたのに
満州の片隅へ捨て去られてしまった
私は日本国へ命を預けていたのに

した。なかにし礼は、およそ 5,000 曲に及ぶ作詞をして『天使の誘惑』、『今日でお別れ』、『北酒場』など 3 度の日本レコード大賞を受賞した。なお、『風の盆恋歌』と『櫻』は日本作詞大賞を受賞している。作家として兄との関係を綴った『兄弟』は直木賞受賞候補作になり、平成 12 年の『長崎ぶらぶら節』は直木賞を受賞したが令和 2 年末に享年 82 で旅立った。

7．戦後における昭和の童謡

昭和 13 年（1938）の『兵隊さんの汽車』（詞：富原薫、曲：草川信）は戦後の 20 年に歌詞を替え『汽車ポッポ』（作詞者・作曲者は同じ）は新たな歌として、また『里の秋』（詞：斎藤信夫、曲：海沼實）も発表された。NHK のラジオドラマ「鐘の鳴る丘」の主題歌『とんがり帽子』（詞：菊田和夫、曲：古関裕而）が人気を得て、その後も『夏の思い出』（詞：江間章子、曲：中田喜直）、『かわいいかくれんぼ』（詞：サトウハチロー、曲：中田喜直）、『めだかの学校』（詞：茶木滋、曲：中田喜直）、『あざみの歌』（詞：横井弘、曲：八洲秀章）、『小さい秋みつけた』（詞：サトウハチロー、曲：

里の秋

静かな静かな
里の秋
お背戸に木の実の
落ちる夜は
ああ 母さんと
ただ二人
栗の実 煮てます
いろりばた

兵隊さんの汽車（13年）

汽車汽車 ポッポ ポッポ
シュッポ シュッポ
シュッ ポッポウ
兵隊さんを乗せて
シュッポ シュッポ
シュッ ポッポウ
僕等も手に手に日の丸の
旗を振り振り送りませう
萬歳 萬歳 萬歳
兵隊さん兵隊さん 萬々歳

夏の思い出

夏が来れば 思い出す
はるかな尾瀬 とおい空
きりの中に 浮びくる
やさしい影 野の小路
みず芭蕉の花が 咲いている
夢見て咲いている 水のほとり
しゃくなげ色にたそがれる
はるかな尾瀬 とおい空

汽車ポッポ（20年）

汽車汽車 ポッポ ポッポ
シュッポ シュッポ
シュッ ポッポ
僕らを のせて
シュッポ シュッポ
シュッ ポッポ
スピード スピード窓のそと
畑も とぶとぶ 家も とぶ
走れ 走れ 走れ
鉄橋だ 鉄橋だ 楽しいな

あざみの歌

山には山の
うれいあり
海には海の
悲しみや
ましてこころの
花ぞのに
咲しあざみの
花ならば

とんがり帽子

緑の丘の 赤い屋根
とんがり帽子の 時計台
鐘が鳴ります キンコンカン
メイメイ子山羊も 鳴いてます
風がそよそよ 丘の上
黄色いお窓は おいらの家よ

雪山讃歌

雪よ岩よわれらが宿り
おれたちゃ町には
住めないからに
おれたちゃ町には
住めないからに
シールはずしてパイプの煙
輝く尾根に春風そよぐ
輝く尾根に春風そよぐ

お お牧場はみどり

おお牧場はみどり
草の海かぜがふく
おお牧場はみどり
よく茂ったものだ ホイ
雪がとけて 川となって
山をくだり 谷をはしる
野をよこぎり 畑うるおし
呼びかけるよ わたしに
ホイ

かあさんの歌

母さんが
夜なべをして
手袋編んでくれた
木枯し吹いちゃ
冷たかろうと
せっせと
編んだだよ
ふるさとの
便りも届く
いろりの
においがした

かわいいかくれんぼ

ひよこがね おにわで
ぴょこぴょこ かくれんぼ
どんなに じょうずに
かくれても きいろい
あんよが みえてるよ
だんだんだれが
めっかった

サッちゃん

一 サッちゃんはね
サチコって いうんだほんとはね
だけど ちっちゃいから
じぶんのこと
サッちゃんって よぶんだよ
おかしいな サッちゃん
三 サッちゃんがね
とおくへいっちゃうってほんとかな
だけど ちっちゃいから
ぼくのこと
わすれて しまうだろ
さびしいな サッちゃん

めだかのがっこう

めだかのがっこうはかわのなか
そっとのぞいて みてごらん
そっとのぞいて みてごらん
みんなで おゆうぎしているよ

小さい秋見つけた

だれかさんが だれかさんが
だれかさんがみつけた
ちいさい秋 ちいさい秋
ちいさい秋 みつけた
目かくしおにさん
手のなるほうへ
すましたお耳に
かすかにしみた
呼んでる口笛 もずの声
ちいさい秋 ちいさい秋
ちいさい秋 みつけた

いっぽんでもニンジン

1（いち）いっぽんでも ニンジン
2（に）にそくでも サンダル
3（さん）さんそうでも ヨット
4（よん）よつぶでも ゴマシオ
5（ご）ごだいでも ロケット
6（ろく）ろくわでも シチメンチョウ
7（しち）しちひきでも ハチ
8（はち）はっとうでも クジラ
9（きゅう）きゅうはいでも ジュース
10（じゅう）じゅっこでも イチゴ

ぞうさん

一 ぞうさん ぞうさん
おはなが ながいのね
そうよ かあさんも
ながいのよ
二 ぞうさん ぞうさん
だれが すきなの
あのね かあさんが
すきなのよ

山のロザリア

山の娘ロザリア
いつも一人うたうよ
青い牧場日昏て
星のでるころ
帰れ 帰れも一度
忘れられぬあの日よ
涙ながし別れた
君の姿よ

およげ!たいやきくん

まいにち まいにち
ぼくらは てっぱんの
うえで やかれて
いやになっちゃうよ
あるあさ ぼくは
みせのおじさんと
けんかして うみに
にげこんだのさ

中田喜直)、『かあさんの歌』(詞、曲：窪田 聡)、『おお牧場はみどり』(詞：中田羽後(うご)、曲：チェコスロバキア民謡)、『雪山讃歌』(詞：西堀栄三郎、曲：アメリカ民謡)、『サッちゃん』(詞：阪田寛夫、曲：大中恩(おおなかめぐみ))、『山のロザリア』(詞：丘灯至夫(とかしお)、曲：ロシア民謡)、『ぞうさん』(詞：まどみちお、曲：團伊玖磨(だんいくま)) など、現代でも歌われている童謡などが発表された。

昭和 36 年（1961）からは NHK「みんなのうた」の放送が開始され、テレビやラジオを通じて毎月のように新しい童謡が次々と放送されていった。昭和 48 年（1973）からはフジテレビ系の子供向け音楽番組「ひらけ!ポンキッキ」の放送がスタートし『およげ!たいやきくん』(詞：高田ひろお、曲：佐瀬寿一)、『いっぽんでもニンジン』(詞：前田利博、曲：佐瀬寿一）など、テレビ番組から生まれた童謡が大きな人気を博すようになった。

昭和 40 年代以降、テレビ番組のアニメソングや J-POP などの陰に隠れ、童謡を歌ったり聞いたりする機会は次第に少なくなっているようである。しかし、保育園・幼稚園や小・中学校の音楽の授業で古い童謡も教えて欲しいと願っている。幼い頃に歌った思い出は後に懐かしく、ふと口ずさんだりする機会を得ることになるであろう。なお、ご高齢者の認知症予防や施設慰問など昔の童謡や唱歌は好評で活用されており、童謡はまさに心の故郷とも言える歌である。